鳥取県八頭郡郡家町

土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰ

1979. 3 .20

郡家町教育委員会

序

土師百井廃寺跡発掘調査は、本町唯一の国指定史跡である『土師百井廃寺塔跡』の保存にかかるもので、その寺域と思われる部分が、昭和52年度から実施されている県営八頭中央地区ほ場整備事業の範囲内であり、近くその事業が施工の見通しとなったため、事前に調査を実施したものである。

本調査は、トレンチ方式により、寺跡の規模と伽藍配置等を確認しようとしたもので、今回の調査によって、金堂，中門，回廊，築地等の遺構が確認され、所期の目的が達せられた。

この発掘調査を実施するにあたって、ご指導いただいた方々と、その他関係各位に対し、本調査報告書の紙上でもって深く感謝と敬意を表します。

昭和54年3月20日

郡家町教育委員会

教育長　石　谷　　収

例　　言

1. 本書は、昭和53年度国庫補助を得て実施した土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰである。
2. 本書に使用した方位は真北をさす
3. 現地調査は、三木薫，吉村博恵が担当し、県文化課清水真一がこれを指導し、町教育委員会丸山勉が補佐した。また、本書の作成については、上記4名が担当したほか、県文化課野田久男，森田純一の協力を得た。
4. 各項の執筆は、第1章を野田が、第2章第2節2，第3，4節を清水が担当し、第3章第1節は三木薫の『慈住寺の研究』から一部を転載し、第2節は清水が行った。残りのすべては吉村が担当した。
5. 写真は、調査遺構について、吉村，清水，森田が、遺物について清水が担当した。
6. 本書の編集は、吉村，清水が行った。

調査団名簿

調査団長	石谷　収（町教育長）
調査員	吉村博恵（大阪府立佐野高校講師）
〃	三木　薫　岡本君太郎　入江　清
	田中信行　山崎　聖　森岡弥寿夫
	木村鶴蔵　栄田光夫　上嶋武夫（町文化財保護委員）
調査指導	清水真一（県教育委員会文化課）
事務局	丸山　勉（町教育委員会社会教育係）
調査補助員	中谷裕一　藤原敏晃（鳥取大学歴史学研究クラブ員）
	笹尾千恵子（皇学館大学考古学研究会）
	田中益美　猪本公洋　猪本泰教
作業員	西尾　耕　植田和恵　上田君江　三木千香江
	三木恵子　森木実男　西尾佐恵子　上嶋和子
調査協力	藤田　稔　森下定治　森下光明
	三木　廉（土地所有者）
	森　浩一（同志社大学教授）
	白石太一郎（文化庁文部技官）
	森田純一　野田久男（県教育委員会文化課）

目　　次

序　言

例　言

目　次

挿図・図版目次

第1章　土師百井廃寺周辺の歴史的環境 …… 1

第2章　調査の結果 …… 4

第1節　遺　構 …… 4

1.　塔跡地区 …… 4

2.　金堂跡地区 …… 4

3.　中門跡地区 …… 5

4.　回廊跡 …… 5

5.　北築地跡 …… 5

6.　その他 …… 6

第2節　遺　物 14

1.　瓦 …… 14

(1)　軒丸瓦 …… 14

(2)　平　瓦 …… 14

(3)　丸　瓦 …… 14

(4)　鴟　尾 …… 14

(5)　文字瓦 …… 14

2.　仏　具 …… 14

(1)　螺　髪 …… 14

(2)　鎮壇具 …… 15

3.　土　器 …… 19

4.　勝間田焼メモ …… 20

第3章　考察編 …… 21

第1節　「慈住寺」についての考察 …… 21

第2節　「土師百井式軒丸瓦」の分布について …… 24

第4章　まとめ …… 28

挿図・図版目次

挿 図 1. 土師百井廃寺周辺遺跡位置図 …… 3
〃 2. 土師百井廃寺トレンチ位置図及び伽藍配置図 …… 7
〃 3. 第1トレンチ・第2トレンチ実測図 …… 9
〃 4. 第3・5トレンチ実測図 …… 11
〃 5. 第2東トレンチ・第4トレンチ及び
第1～5トレンチ断面実測図 …… 12
〃 6. 第6～10トレンチ実測図 …… 13
〃 7. 文字瓦・螺髪実測図 …… 15
〃 8. 軒丸瓦・実測拓本図 …… 16
〃 9. 平瓦実測拓本図 …… 17
〃 10. 丸瓦実測拓本図 …… 17
〃 11. 鴟尾・鎮壇具実測図 …… 18
〃 12. 出土遺物実測図 …… 19
〃 13. 勝間田焼実測拓本図 …… 20
〃 14. 土師氏関係因幡地名表 …… 27
写真図版 1. 土師百井廃寺遠景
〃 2. 〃 近景
〃 3. 第1・4トレンチ
〃 4. 第2・3トレンチ
〃 5. 金 堂
〃 6. 回廊・中門・塔
〃 7. 6～10トレンチ
〃 8. 軒 丸 瓦
〃 9. 仏具・鴟尾・文字瓦
〃 10. 丸瓦・平瓦
〃 11. 平瓦，奥谷瓦窯・菖蒲廃寺出土「土師百井式軒丸瓦」
〃 12. 土 器

第1章　土師百井廃寺跡周辺の歴史的環境

土師百井廃寺跡のある郡家町は、鳥取市の南に位置し、古代因幡国の八上郡にあたる。ここは原始・古代の遺跡に恵まれているが、現在でも各種官庁の出先機関等が集まっていて、八頭郡の政治的中心である。

このあたりには縄文時代以来人々が住みつき、各所に足跡をしるしている。まず、町内の西御門では八東川右岸の沖積地に縄文後期の土器や石匕・石斧・石鏃・石錘等を出した遺跡があり、昭和43年5月帝塚山大学によって発掘調査が行われた。さらに町の北側にあたる鳥取市南部の船木・古郡家では縄文土器（晩期）が、河原町佐貫や鳥取市橋本では打製石斧が発見されている。

ついで、稲作が普及した次の弥生時代には石器に加えて金属器が登場する。町内の下坂で見つかった銅鐸は、袈裟襷文で飾られた完形品で昭和9年国の重要美術品に認定されている。また、南の船岡町破岩でも寛政7年銅鐸一口が出土し『因幡志』に紹介されているが残念ながら現存しない。弥生前期の土器を出す遺跡はまだ知られていないが、中期にはいると隣りの河原町今在家で出土しているし、後期には遺跡が増加し智頭町埴師のような八頭郡の奥地にも遺跡が出現する。近い例では、郡家町山田・鳥取市久末等で終末期の土器が発見されている。

一方、弥生文化の所産である太型蛤刃石斧は、郡家町花原字深谷・上峰寺字花ケ尾・土師百井・鳥取市赤子田・古郡家字伊勢谷で出土し、私都川流域の郡家町上津黒の丘陵では石庖丁が採集されている。このほか河原町布袋でも環状石斧の出土が推定されている。しかし、発掘調査例の少ないことと相俟って郡家町をはじめ八頭郡では、この時代の竪穴住居跡等の遺構は未発見である。

農耕社会の発展に伴う富の蓄積によって貧富の差が生じ、階級分化が進むと墓制の上でも変化が起り各地に支配者の墓である古墳が造られるようになる。鳥取平野南部の丘陵は因幡でも有数の古墳群地帯であるが、その山なみに接する郡家・河原の丘陵上にも多くの古墳が営まれている。

中国山地から北流する千代川の流域にひらけた八頭郡の町や村には、鳥取県教育委員会の分布調査によって約650基の古墳が確認されている。このうちの87%を占める古墳が、土師百井廃寺跡のある郡家町と河原町に集中している。しかも、八頭郡最大を誇る曳田の獄古墳(全長50m)・郷原7号墳（全長30.5m）・宮谷1号墳（全長32m）・寺山古墳など7基の前方後円墳もこの2町に限られていて、郡家・河原以南では確認されていない。

これまでのところ、八頭郡内には鳥取市南部の六部山3号墳・古郡家1号墳・赤坂1号墳などのように古墳時代前期・中期に遡る確実な古墳は判明していないが、古式に属すると推定されるものとしては、最近4世紀代の仿製方格規矩鳥文鏡が出土した八東町の重枝古墳とか、この附近では大型に属する円墳で埴輪を囲繞させた郡家町久能寺の御建山古墳が挙げられよう。この両者は既に破壊されてなくなっているが、主体部の型式は粘土槨ないし木棺直葬と考えられる。このほか河原町山手1号墳・同7号墳など銅鏡を副葬した古墳があって、古い古墳の可能性を想定さ

せるが遺物が伝わっておらず詳細は不明である。

さて、古墳時代後期になると各地で古墳が爆発的に増加するがこの地域も例外ではなく、鳥取市空山や霊石山の中腹から麓にかけて群集墳の形成が見られる。この時期の古墳は、横穴式石室を内部構造とする通有のものが多く、河原町佐貫大平古墳・船岡町坂田２号墳のように、石室内に箱式石棺を有する円墳もある。また、佐貫では県内には類例の乏しい陶棺が発見されていて、陰陽の交流の一端を窺わせる。

横穴式石室を主体とする主な古墳群には、空山・稲常・米岡・池田・福本の各古墳群がある。町内の後期古墳を代表するものに、郡家寺山古墳と福本大塚古墳がある。まず、前者は全長37.5mの前方後円墳で後円部に横穴式石室をもち、昔金環・直刀・須恵器が掘り出された。後者は直径18m・高さ2.5mの円墳で、長さ3.15m余の玄室内に２つの槨壁を設けている。

さらに、霊石山の東及び南側と空山山塊に構築された横穴式石室群の中には、線刻壁画の描かれた古墳があって一つの分布圏を形成している。すなわち、空山２・９・10・15・16号墳，広岡坊ケ塚古墳，越路54号墳，米岡１・58号墳，福本４号墳などの古墳であり、千代川を隔てた佐貫大平古墳でも認められる。これらの石室には、鳥・人物・舟・綾杉文・幾何学状文等の文様があって、県下では現在までに30基を超える装飾古墳が確認されている。これらの大半は、因幡に集中して分布する特徴がある。

古墳時代には土師器のほかに中途から新たに青灰色硬質の須恵器の生産が開始されるが、この須恵器を焼いた６世紀の窯跡が郡家町福地字トウノ谷・鳥取市越路字カマドなどで発見されている。

次に、日本で最初に法興寺が建立されてから全国各地に仏教が波及した飛鳥から奈良時代にかけての遺跡であるが、この時代のものとしては第一に土師百井廃寺跡を挙げなければならない。この寺跡は八頭郡唯一の古廃寺で、山陰道では稀な塔礎石の完存する塔跡があって、国の史跡となっている。

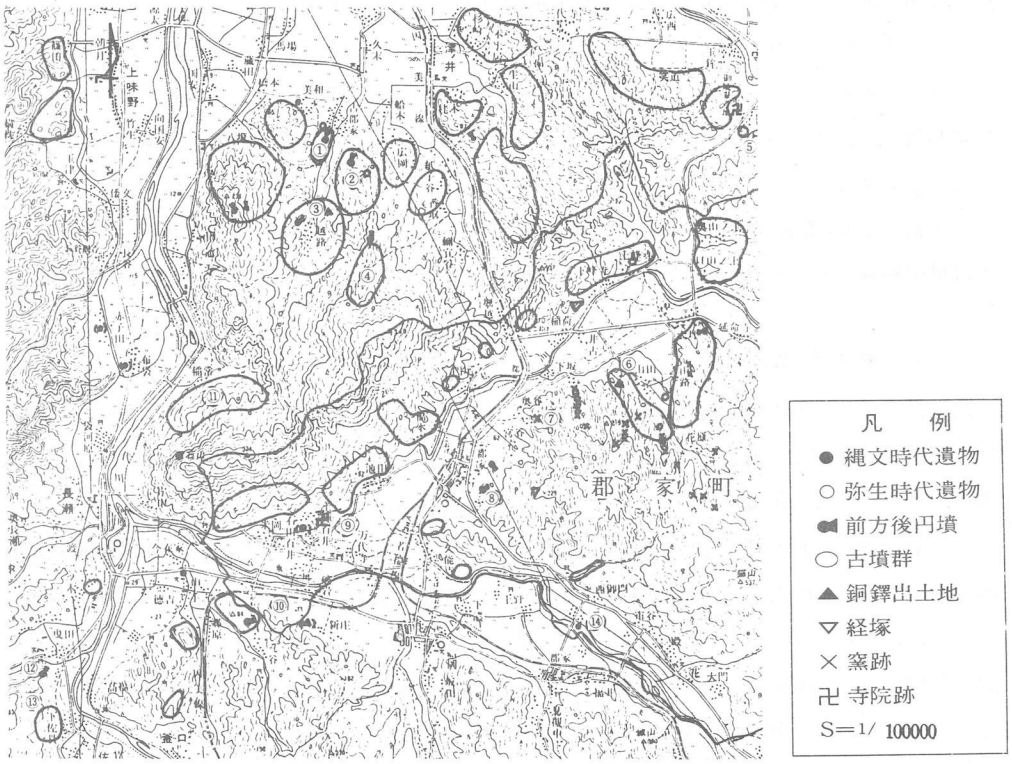
ここは八東川と私都川の合流地点に近く、寺跡のある旧国中・賀茂村の地域は、12の郷をもつ因幡最大の郡であった八上郡の土師郷に比定され、土師部と関係の深い地域と考えられている。また、土師百井の西南約４Kmの河原町曳田附近は旧八上郡曳田郷にあたり、八上比売命を祀る式内社売沼神社が鎮座する。こうした状況から、『鳥取県史』は八上郡の「郡家」は土師百井周辺か曳田附近のいずれかにあったのではないかと想定している。文献の上では奈良時代にできた最古の歌集『万葉集』に「八上采女」の名が見え、『続日本紀』の光仁天皇宝亀５年（７７４）２月のところに「因幡の国八上郡の員外の少領従八位上国造宝頭に姓を因幡国造と賜う」という記事が見えることなどから、延暦15年（７９６）10月に亡くなった正四位上因幡国造浄成女の一族が八上郡にも勢力をのばしていたことが考えられる。

考古学的な遺跡や遺物の方面では、この頃の寺院や官衙に使用された布目瓦を焼いた窯跡が下坂や奥谷にあり、寺跡に近い池田字天王寺でも瓦が出土している。古墳時代には点在していた須

恵器の窯は、奈良時代になると私都谷の山路・山田・花原・下坂に集中した形跡があり、今までに20数基の窯が発見されている。このほか河原町天神原でも灰原が確認されている。私都谷窯跡群の北側には、古代因幡における政治・文化の拠点であった因幡国府が置かれた国府町があり、須恵器の需要と供給の点において密接な結びつきがあった。この窯跡群については、因幡国ないし八上郡によって営まれた官窯ではなかったかとの見解も出されている。私都の篠波に式内社の美幣奴神社（みてぐらぬ）があり、古代に私部という名代が設置された地域だと言われていて、歴史的に興味ある場所といえよう。

前述のように、今回発掘調査された土師百井廃寺跡の周辺には数多くの遺跡があって、八上郡の中心的位置を占めていた地域にふさわしい歴史的環境であると思われる。

挿図１　土師百井廃寺跡周辺遺跡位置図



① 古郡家１号墳
② 六部山３号墳
③ 越路銅鐸出土地
④ 空山古墳群
⑤ 梶山古墳
⑥ 下坂銅鐸出土地
⑦ 奥谷瓦窯跡
⑧ 寺山古墳
⑨ 土師百井廃寺跡
⑩ 郷原７号墳
⑪ 稲常古墳群
⑫ 獄古墳
⑬ 佐貫古墳群（大平古墳他）
⑭ 西御門遺跡

第2章　調査の結果

土師百井廃寺は塔の礎石が完全に残存しており、周辺部にも廃寺に伴う礎石らしい石が散在している。以前から塔跡を中心に諸々の報告が行なわれてきたが、本格的な発掘調査は今回がはじめてである。調査は従来推定されていた法起寺式伽藍配置を想定して、夏期は金堂部分および塔南面部に、冬期は寺域北限部分を中心にトレンチを設定した。

1節　遺　構

1. 塔跡地区

塔跡は心礎を中心に17の礎石が原位置のまま残存しており、史跡に指定されている。そのため指定地域南面の野菜畑に南北24m東西2mの第3トレンチを設定した（心礎より真南）。第3北トレンチ北側で約30cm掘り下げたところ、河原石と瓦を立て並べた石・瓦列が東西に出土した。石・瓦列の南側は瓦片を多量に含んだ黄褐色土であり、北側は固く叩きしめられた褐灰色砂礫土で塔基壇の土と考えられる。石・瓦列は心礎より約8mのところに位置し、塔基壇の南端と考えることができる。

石・瓦列より1.2m南に幅1m，長さ1.4m（出土部分）の平らな大きい自然石が出土した。石は塔中軸線よりやや西によっており、その性格は明らかでない。

2. 金堂跡地区

数年前に梨の苗木を植えたとき礎石らしいものがあったという証言などから、塔跡西南の旧梨畑に東西19m・南北2mの第1トレンチを設定した。また塔中心より真西線上約30mに、東西5.5m・南北2mの第2東トレンチ，南北9m・東西2mの第4トレンチを設定した。

第2東トレンチおよび第4トレンチからは表土下約20cmに金堂のものと思われる版築面とその西・南端の一部を検出した。版築は礫を多く含んだ黄褐色土・赤褐色粘土・褐灰色砂礫土を用いて固く叩きしめてあった。しかし金堂に伴う礎石および礎石の抜穴などはまったく検出することができなかった。西端部は20〜30cmの河原石を2段に積み、その間などには瓦片や小石が多く埋め込まれていた。南端部は主に10〜30cmの河原石（なかには幅15cm・長さ1mの石もあった）や瓦片を幅約2mにわたり集石した状態で出土し、明確なものではない。西端部は塔の中心より真西37.8mであり、南端部は真西線より8m南に位置する。両端は高さ15〜30cmほどが残存しているだけで基壇はかなり削平されているものと考えられる。

第1トレンチは約40cm掘り下げたところから東西約8mにわたり河原石や瓦片が散乱して出土した（螺髪(3)も出土）。石群の西側はかなり攪乱をうけているが、東側は10〜20cmの平らな河原石が固く叩きしめられた黄褐色土内に埋め込まれた状態で出土しており、金堂前庭部に位置す

る石敷の一部と考えられる。石敷の南端を確かめるため第1トレンチ中央より南北4.5m・東西2mのトレンチを延長したが、梨木の肥料穴のため攪乱されていて確認することができなかった。

3. 中門跡地区

第3北トレンチを小道をはさんで南に10m延長したのが第3南トレンチである（東西2.7～2m）。第3南トレンチも第3北トレンチともに耕作土内に瓦片を包含していたが、第2層褐灰色砂礫土内には多量の瓦片が含まれていた。

塔の南北中軸線より西1.2mのところから、南北4.5mにわたり径40～60cmの花崗岩が9個整然と並んで出土した。石の間々は5～10cmの石や漆喰で丁寧に埋め固めてあった。この石列は中門の基壇に伴う地覆石下の布敷の石に相当するもので、中間の東縁北部にあたるものと考えられる。布敷の石列が表土下約20cmのところから出土しており、基壇はかなり削平されているものと思われる。

4. 回 廊 跡

第1トレンチ西部（塔南北中軸線より35.1m）の表土下85cmから平石を南北に立て並べた石列が出土した。また第1トレンチから50cm隔てて西へ10.5m 延長した第5トレンチ東部（塔南北中軸線より40.5m）の表土下1.2m からも平石を南北に立て並べた石列が出土し、第1トレンチ西部の石列に対応するものと思われる。この石列間は5.4m で、黄褐色砂礫土・茶黄色土が固く叩きしめられており、伽藍西端の回廊の一部と考えられる。第1トレンチ石列の延長部を第2東トレンチで求めたが、石・瓦片を多量に含んだ褐灰色砂礫土が続き、かなり攪乱をうけていて検出することはできなかった。

第3南トレンチでは塔中心より21.5 m のところから4.5mにわたり、瓦片を多量に包含した固い黄褐色砂礫土があり、両側に10cmほどの河原石が立てられていて回廊部ではないかと思われるが明らかではない。トレンチ南端部から柱座のある礎石が出土したが、すでに原位置を保っておらず、中門または回廊の礎石の一つと考えられる。

5. 北築地跡

塔の中心より33m北・16m西に南北7.5 m・東西1mの第6トレンチを設定し、第6トレンチより16m西のタバコ畑に南北7 m・東西2mの第7トレンチを設定した。第6トレンチ・第7トレンチともに北側表土下30～50 cmから黒褐色土上に散在する河原石群が検出され、第7トレンチでは20～30 cmの平石が東西に並んで出土した。石群部はかなり攪乱されているが、若干の盛り上りが見られ、寺域北側の築地跡の一部と考えられる。この築地は塔東西軸より北38mに位置することになる。第6トレンチ石群部南側に焼土面が検出されたが、いつの時期のものであるか明らかでない。

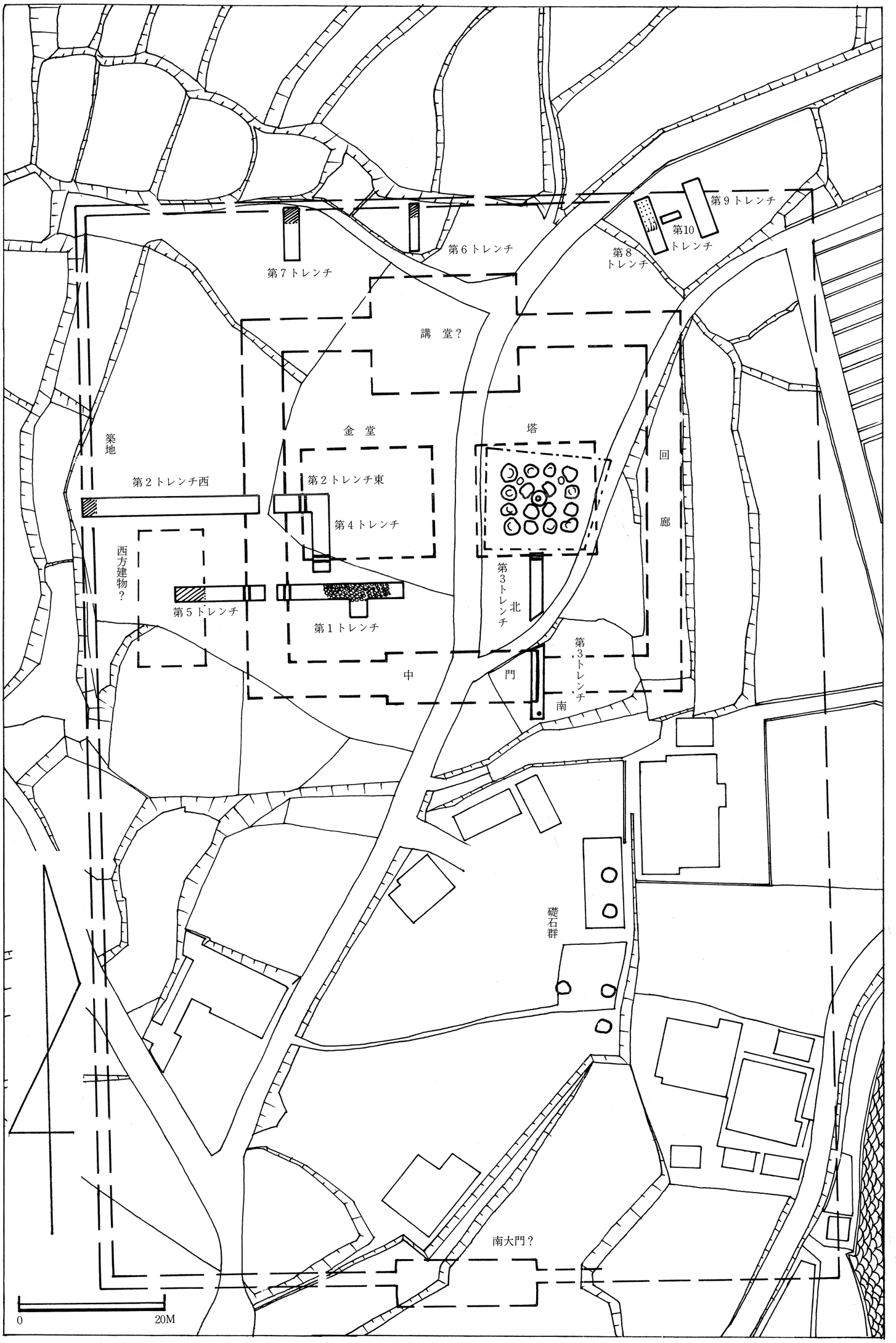
6. そ の 他

第5トレンチで、西回廊石列より 1.3 m 西から礫まじりの固い赤褐色土の土壇状の高まりが見られ、伽藍西方の建築物に伴うものかもしれない。

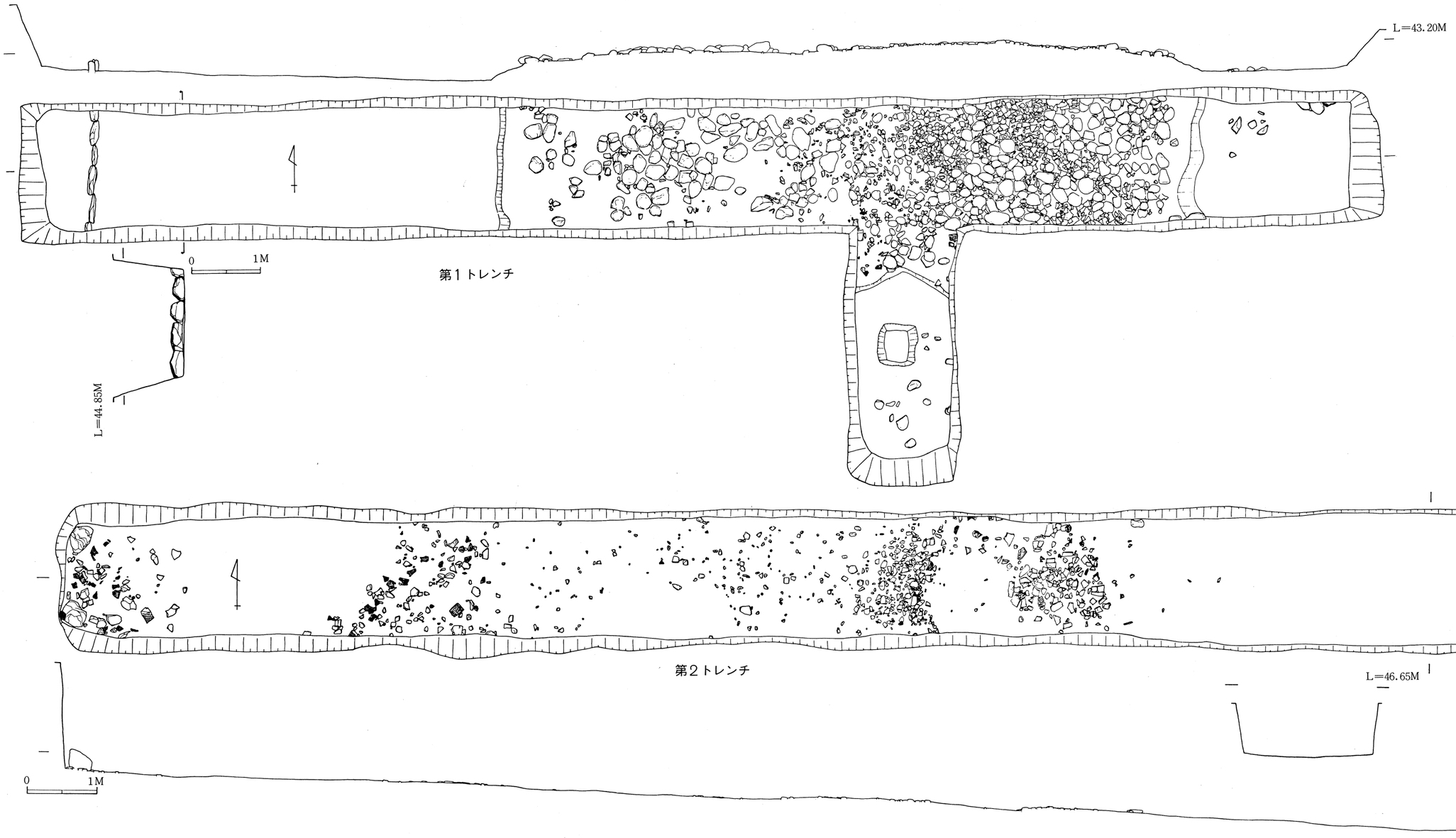
第2西トレンチは第2東トレンチより 2.3 m 隔てて西へ 23.2 m 延長したものである。土砂の堆積（裏山の土砂流出に伴う）がかなりあり、西端部では表土下約 1.5 m のところから多量の瓦片が散在して出土した。トレンチの東側 7 m 間はほとんど瓦片はなく、瓦片群が西端までほぼ4群に分れて散在していた。この状態が何を示しているかは明確にできなかった。

寺域北東隅確認のため、塔跡北方の水田に第8トレンチ（南北 8 m・東西 2 m）、第9トレンチ（南北 8 m・東西 2 m）、第10トレンチ（東西 3 m・南北 1 m）を設定した。耕作土下はかなり攪乱されており、当廃寺に伴う遺構は検出できなかった。第8トレンチ北側に3カ所・第10トレンチに1カ所、柱および柱穴を検出した。とくに第8トレンチ北東隅の柱は保存状態がよく、面は荒く削られており、下部は一段細くなっていた。柱穴は瓦片を多量に包含している暗褐色土を掘り込んでおり、中世の磁器片や羽釜片が附近から出土していることから、これらの時期に伴う建物と思われる。

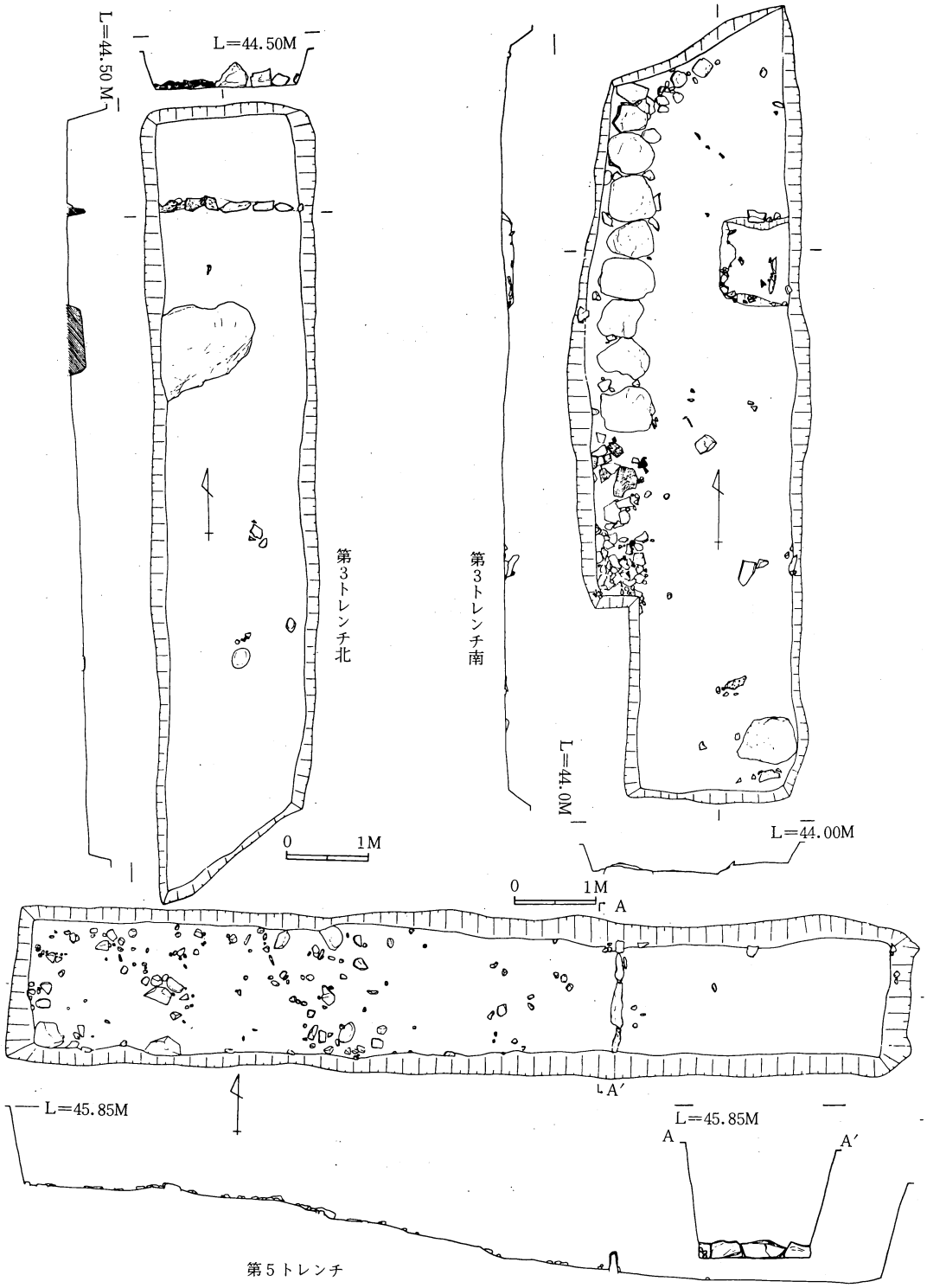
挿図2　土師百井廃寺トレンチ位置図及び伽藍推定図



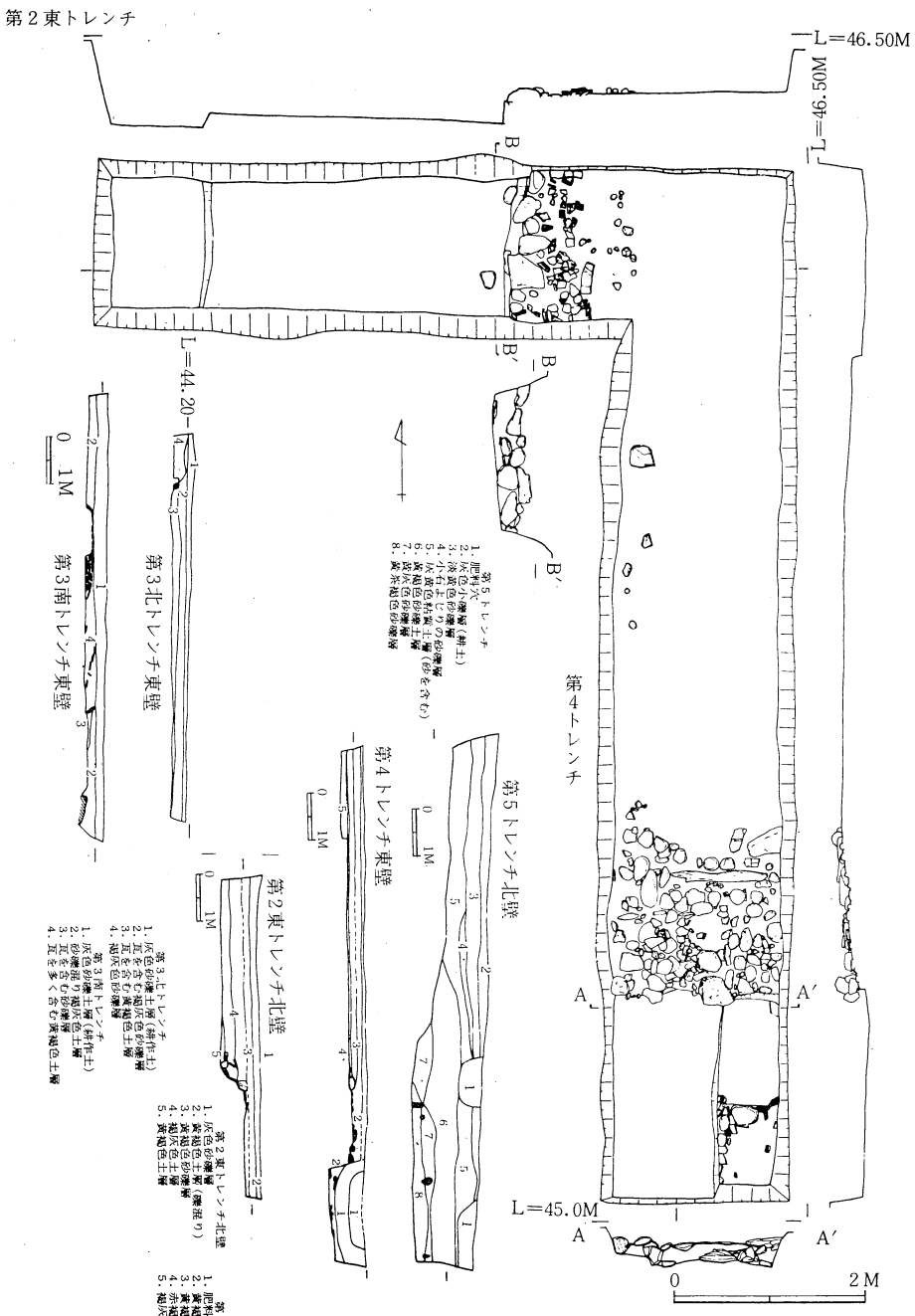
挿図３　第１・２トレンチ実測図



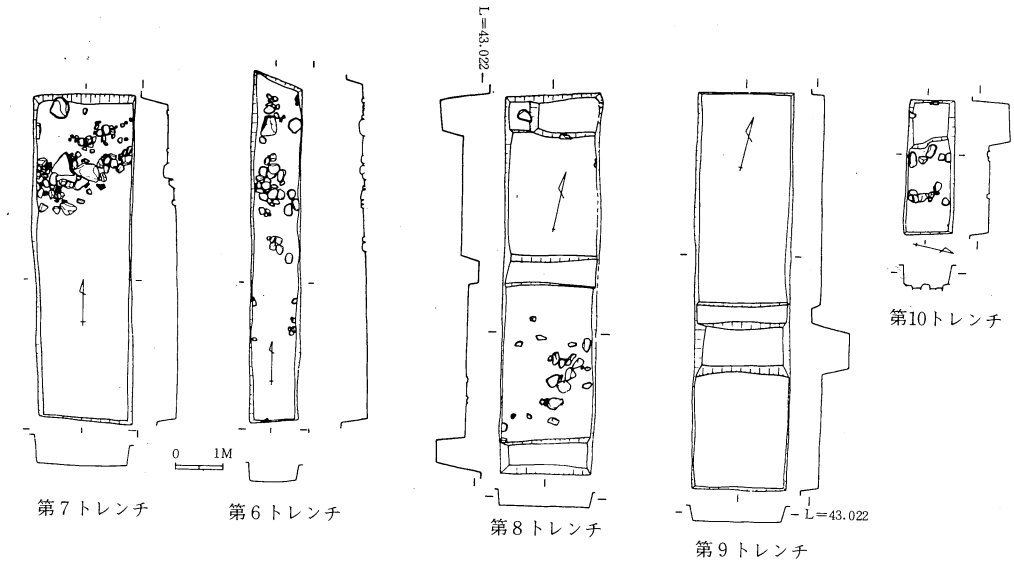
挿図4　第３・５トレンチ実測図

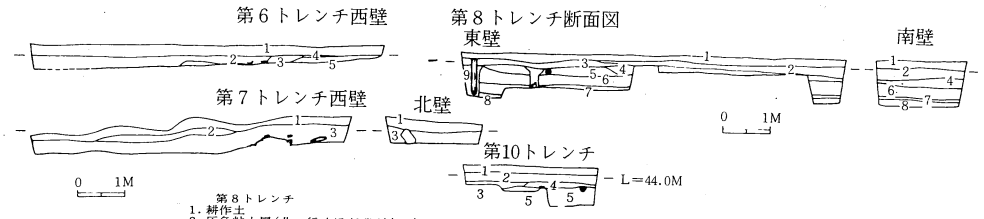


挿図５　第２東トレンチ・第４トレンチ
及び第１～５トレンチ断面実測図



挿図６　第6～10トレンチ実測図
及び第１．２トレンチ断面図



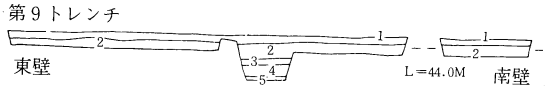


第６トレンチ
1．耕作土(灰色粘土層)
2．暗褐色土礫混り粘質土
3．黒灰色土層
4．焼土層
5．礫混り黒褐色土層

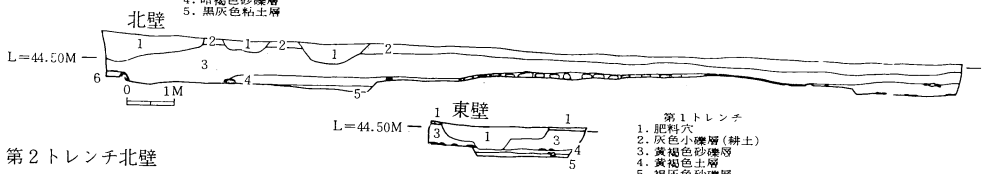
第７トレンチ
1．耕作土
2．暗褐色粘質土層
3．暗褐色礫混り粘質土層

第８トレンチ
1．耕作土
2．灰色粘土層(北へ行くほど礫が多い)
3．礫混り暗灰色粘土層
4．礫混り明褐色粘質土層
5．礫混り暗褐色土層
6．礫混り暗褐色土層(暗褐色粘土を含む)
7．暗灰色粘土層
8．暗灰色瓦混り礫層
9．礫混り暗褐色土層

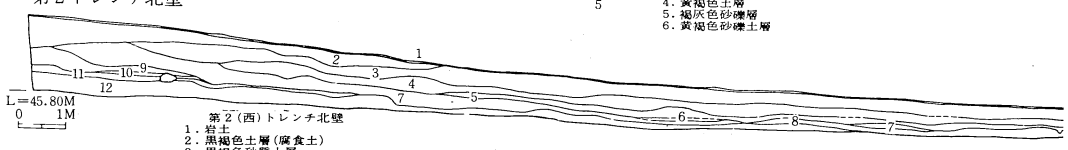
第10トレンチ
1．耕作土
2．黄灰色粘土層
3．明褐色土層
4．炭混り暗褐色土層
5．暗褐色砂礫層



第９トレンチ(東壁・南壁)
1．耕作土(灰色粘土層)
2．黄色粘土層
3．青灰色砂礫層
4．暗褐色砂礫層
5．黒灰色粘土層



第１トレンチ
1．肥料穴
2．灰色小礫層(耕土)
3．黄褐色砂礫層
4．黄褐色土層
5．褐灰色砂礫層
6．黄褐色砂礫土層



第２(西)トレンチ北壁
1．盛土
2．黒褐色土層(腐食土)
3．黒褐色砂質土層
4．黒褐色土層(小石まじり)
5．黒褐色土層(砂まじり)
6．砂利層
7．灰色砂層
8．灰色粘土層(褐色土まじり)
9．灰色砂層(小石多く含む)
10．砂利層
11．灰色粘土層
12．黒褐色粘質土(石まじり)

2節　遺　　物

1. 瓦

(1) 軒　丸　瓦

軒丸瓦は29点出土したが、すべて従来知られている重圏文八葉素弁（単弁）蓮花文の一種だけであった。

花弁は中肉で弁端は尖形であり、子葉はなく中央に稜線を有する。間弁は広く高い。中房は径3*cm*ほどでやや小さく1＋4の連子を配しているが、花弁よりも低い。周縁は本体とは別に付着しており重圏文の2溝もヘラ描きのため不整形である。中房と弁区間および弁区を周縁間にそれぞれ一重の圏線を有している。

出土した軒丸瓦の中には、①の周縁部の一部や②の連子の一つのように、明らかに焼成前に破損，変形したものがみられた。とくに④のように区内全体が平らにカキけずられているものもあった。

(2) 平　　瓦

平瓦には1枚づくりのものと4枚づくりの2種がみられる。1枚づくりのものは裏面に浅い格子目叩き痕がみられ、表面にやや荒い布目痕が見られる。側面にも布目痕があり、ヘラけずりによる整形はみられず凹凸がある。4枚づくりのものは細かい布目痕がみられ、2～3*cm*幅の模骨痕が明確に残存している。裏面には深い格子目叩き痕がみられ、側面はヘラで3面けずって整形している。

(3) 丸　　瓦

丸瓦は内面に細かい布目痕があり、外側はほとんどすり消して整形している。多くはいわゆる行基葺の無段式のものであるが、第1トレンチ石敷上から玉縁のある有段式のものが出土している。

(4) 鴟　　尾

第3南トレンチ南側と第2西トレンチ中央瓦片群の中から出土した。両者とも背部の一部とみられ、第3南トレンチのものは反の部分と思われる。表面は黄褐色で平行線の叩き痕があり、裏面は同心円文の叩目文がみられる。厚さ3～3.5*cm*。

(5) 文　字　瓦

文字瓦は丸瓦外面に「（因）幡」の字がヘラで書いてあった。

2. 仏　　具

(1) 螺　　髪

螺髪は第2トレンチ中央の瓦片群内から2個、第1トレンチ石敷上から1個出土した。3個とも白褐色でややもろい。

① 第2西トレンチ中央瓦片群内より出土。磨滅がひどく、3重目以下ははっきりしない。現高4.6㎝，底部径3.4㎝。

② 第2西トレンチ中央瓦片群内より出土。右巻で6重。現高4.7㎝，底部径3.3㎝。底部には径0.75㎝，深さ1㎝の円孔がうがってある。

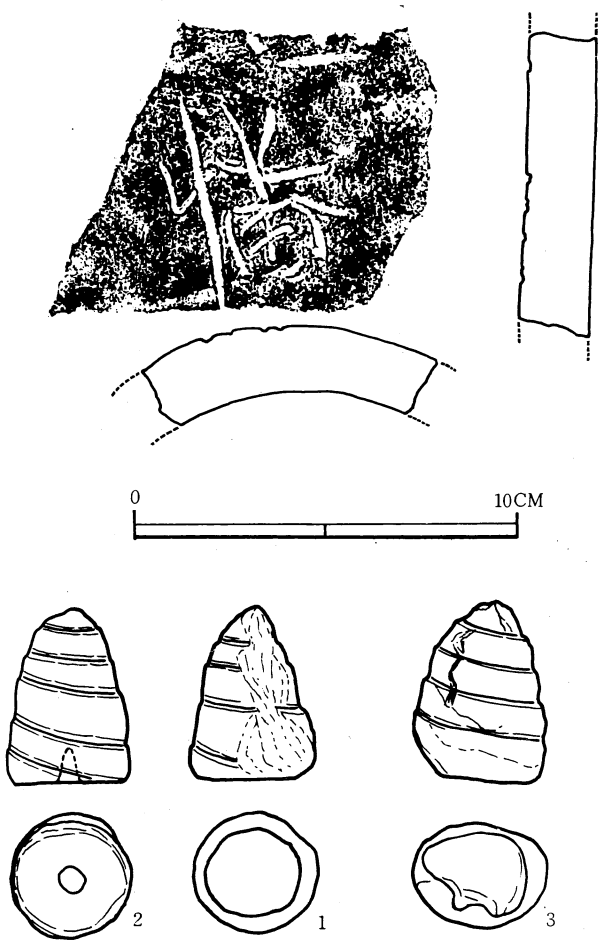
③ 第1トレンチ石敷上より出土。現高4.9㎝，底部は磨滅がひどく現径2.8～3.5㎝。右巻で5重。

(2) 鎮 壇 具

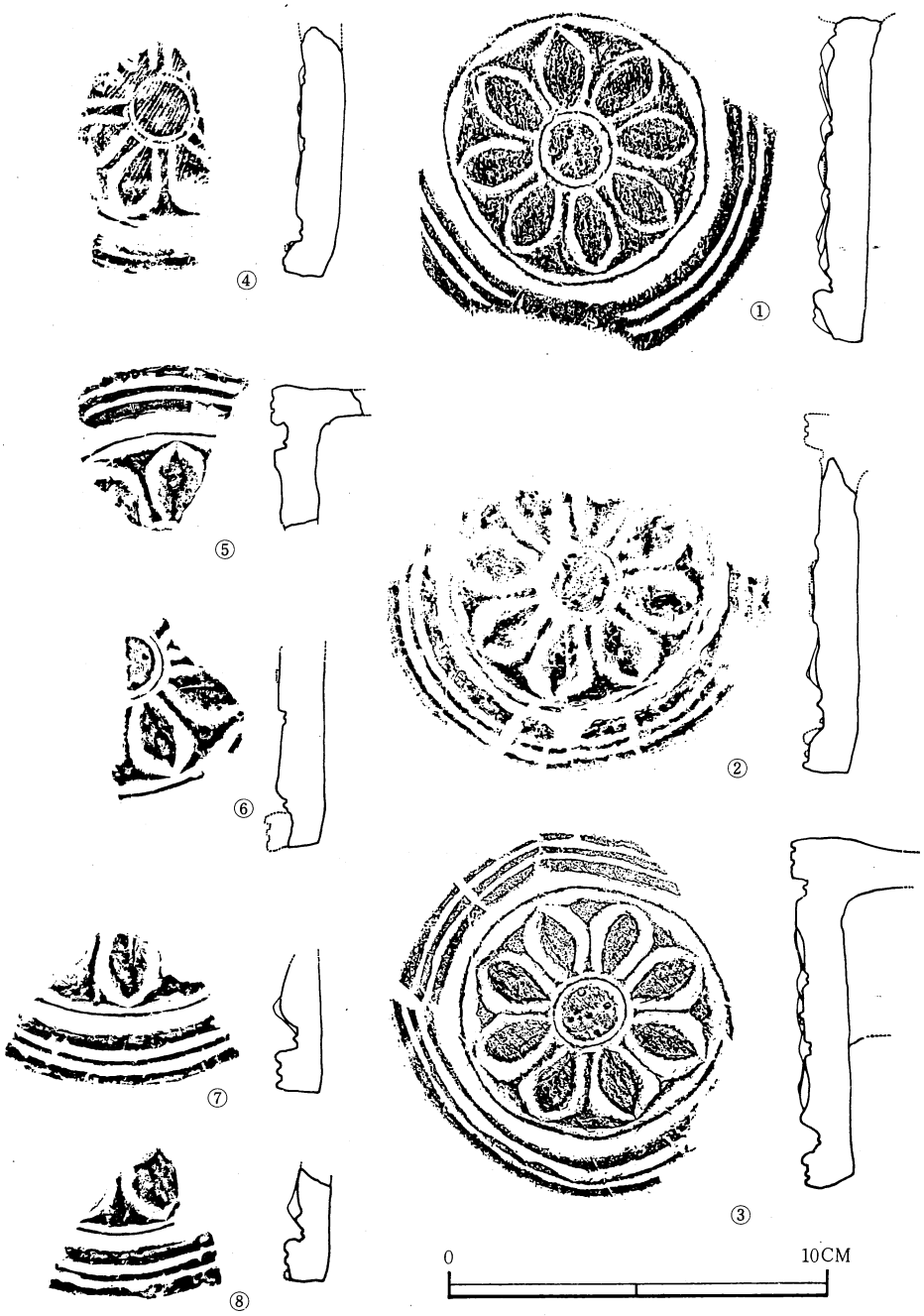
鎮壇具は第1トレンチ石敷上から出土した。螺髪3出土地点の近くである。

表面は稜線を中心にやや両側がさがり、外線にそって1条の沈線と稜から中心へむかう2条の沈線とがみられる。軒丸瓦の蓮華文の花弁を思わせる。表面は暗灰色で硬いが、内面は軟かく軽い。螺髪の胎土に似ており、ゆえに瓦の一種よりも鎮壇具の可能性が高いと考えた。

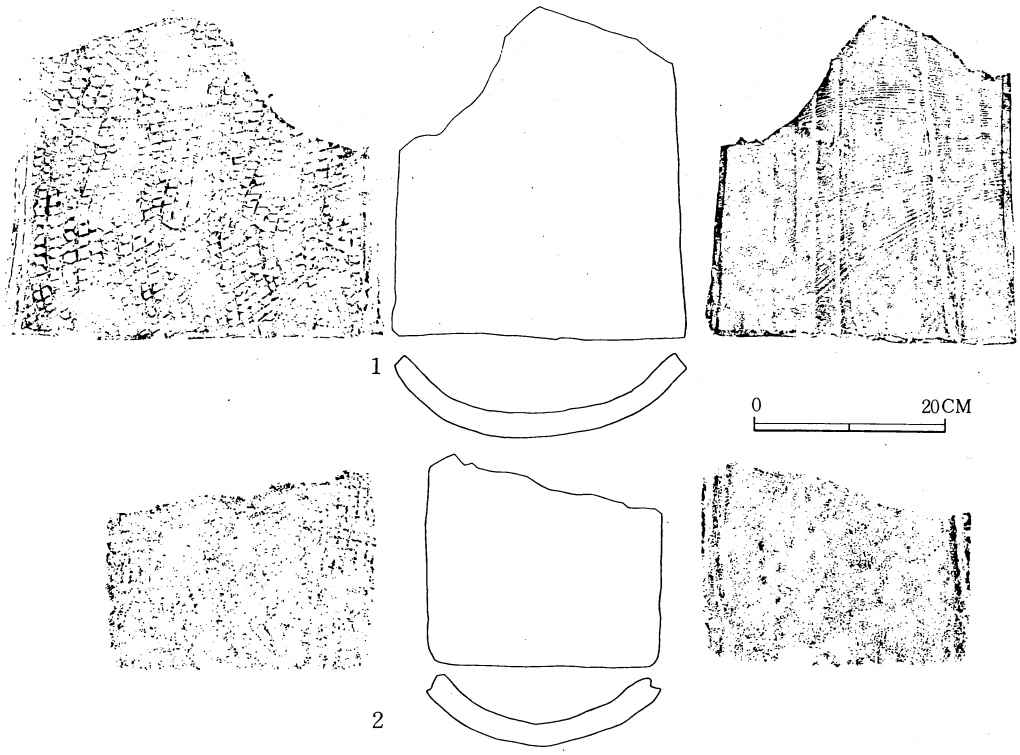
挿図7 文字瓦螺髪実測図



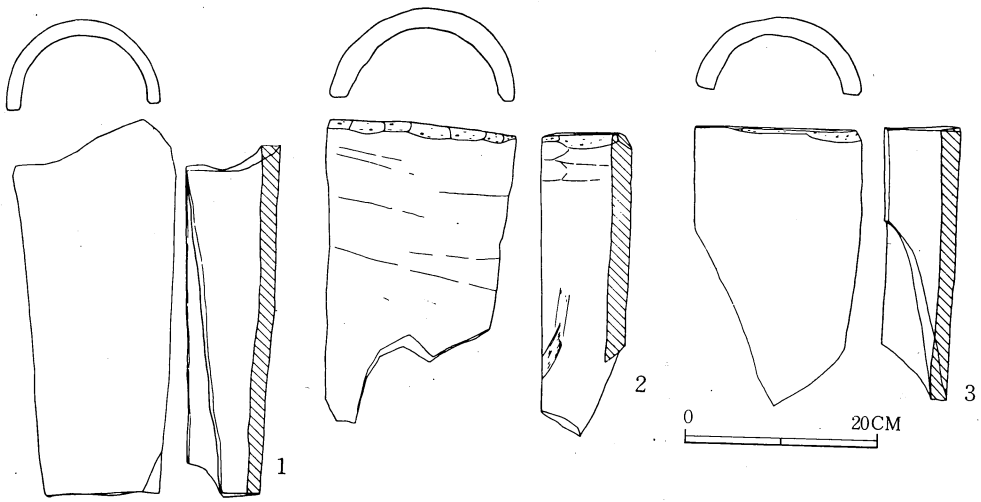
挿図8　軒丸瓦実測拓本図



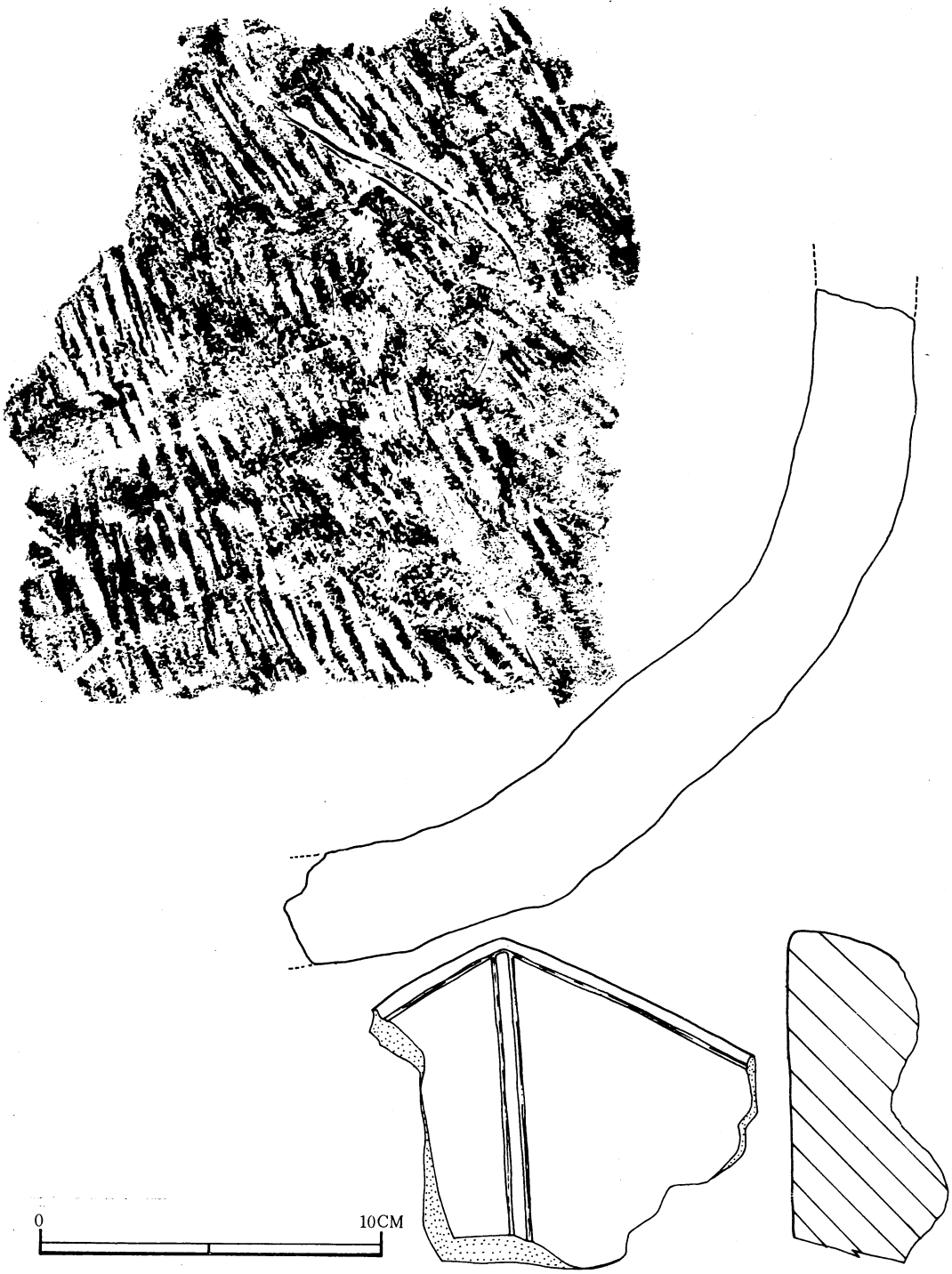
挿図９　平瓦実測拓本図



挿図10　丸瓦実測図



挿図11　鴟尾・鎮壇具実測図



2. 土　　器

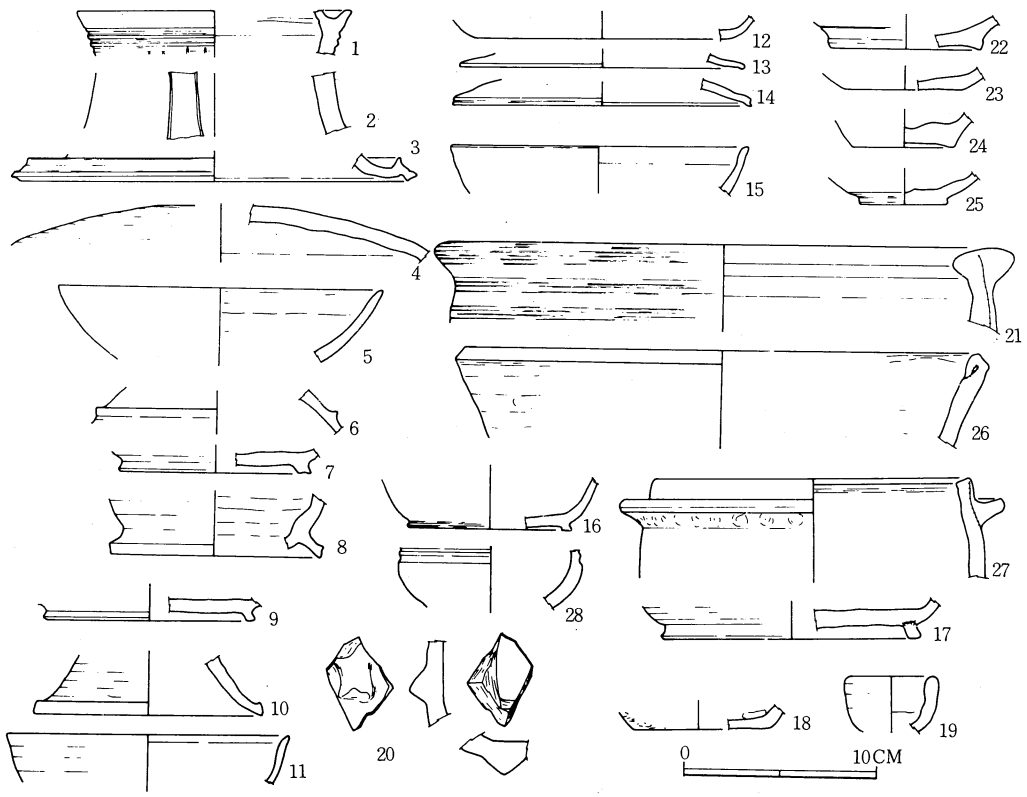
出土した土器の量は、平瓦，丸瓦に比べるとはるかに少ないが、それぞれに興味のある器種が出土している。そして、土師百井廃寺建設以前の遺物が皆無であった点、寺域選地の問題とともに、周辺の遺跡を考える上に一つの資料が提供された。

廃寺関係の土器は、須恵器（ 8 ），杯（ 4,7,9,11～17 ），高杯（6, 10 ）の他、陶硯（ 1～3 ）がある。杯の中には生焼けに近い軟質の黒灰色のものが多く、私都古窯跡群の生産品と考えられる。この他に人物鼻状（20）があるが。把手の退化形式かとも思われる。陶硯は円面硯の破片が3個出土している。山陰で出土する円面硯は、伯耆国庁や但馬，禰布ケ森遺跡等で完形品がみられるが、それらより古式である。

廃寺以後の土器は、土師質椀底部（22～25 ），瓦質羽釜（ 21,26,27 ），勝間田焼等がある。（21）は西回廊の石列内側の上層から出土しており、内外面研磨が著しい。（5）は山茶椀である。

土器の出土は、第1トレンチ（ 1,2,4,7,13, 14, 16～19 ），第3トレンチ（ 3,8,15, 28 ），第5トレンチ（ 9～12），第6トレンチ（20），第8トレンチ（ 6, 22～27）である。

挿図12　出土遺物実測図



3. 勝間田焼メモ

勝間田産の中世陶器は、近年山陰地方でも類例が確認されてきた。また、その研究も行なわれだしてきた。最近では村上勇氏[(1)]の研究がある。

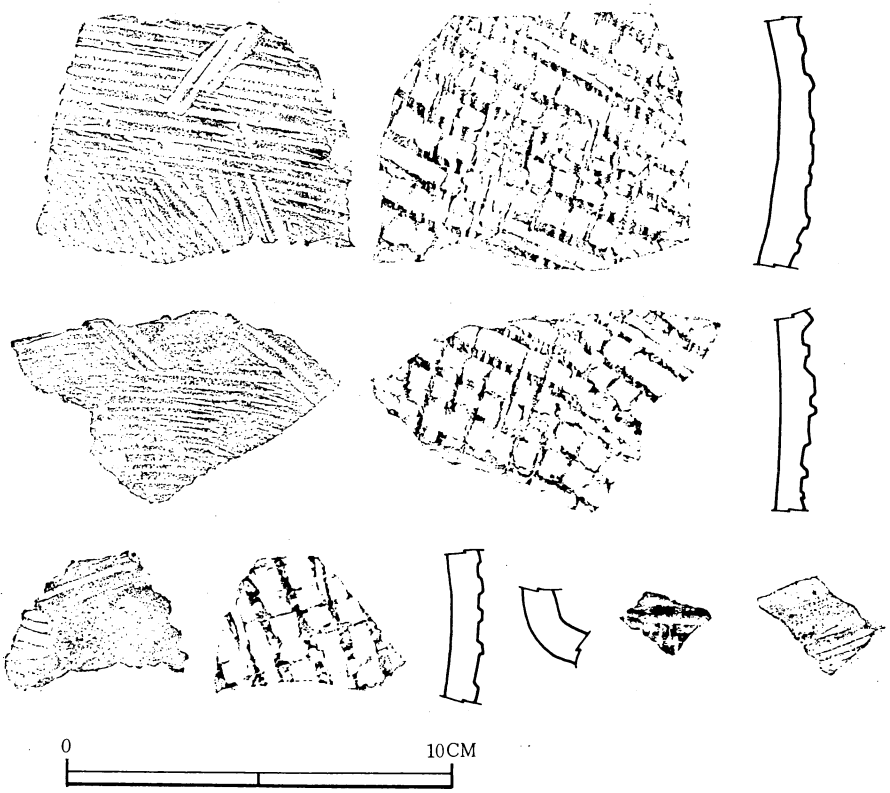
この勝間田産の陶器の特徴は、表面が格子叩き、内面がハケ調整されており、胎土は粘土を練り上げた様な筋が縦に多く入る。土師百井廃寺第8，第10トレンチ出土のものは、淡青色でこの条件を満すものである。

現在のところ、山陰出土で勝間田焼、もしくはこれに近いとみられるものは、因幡国庁，東郷町門田遺跡，米子市青木遺跡などでみられ、今後ともに増加するとみられるが、勝間田焼の実態が今少し明確でないためこれ以上のことはひかえておきたい。ただ、久米廃寺出土の勝間田焼[(2)]に非常に似ており、土師百井廃寺が千代川の支流私都川の下流に位置するため、直接的に勝間田産の陶器が持ち込まれる可能性がきわめて高いといえよう。

注(1) 村上勇「青木遺跡出土の須恵器系甕について」『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

(2) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』 岡山県文化財保護協会　1978

挿図13　勝間田焼実測拓本図



第3章　考　察　編

1節　「慈住寺」についての考察

三　木　　薫

1. 現存する慈住寺

郡家町大字土師百井にあり、本尊薬師如来座像高さ6尺、脇士阿弥陀如来，観音菩薩，毘沙門天で、阿弥陀如来座像高さ6尺、観音菩薩立像高さ4尺、毘沙門天立像高さ3尺3寸あり、他に地中から掘り出されたと伝えられる木像があり、これを目天という。手足の欠け損じた木地の傷んだ立像で、高さ3尺5寸。昔は大門の脇士であったという。この目天は鎌倉時代の作であろうと言われるが、他の仏像は何れも徳川期の作だろうと言う。上述の観音菩薩は昭和35年5月初旬盗難にあい、現在は台座のみが空しく残っている。

今の慈住寺は、村の南東の小丘にあるが、これは明治初年に移転したもので、それまでは村の北方200 mばかりの所、塔跡の傍に草庵があり、泉水もあったという。住職も居て、幕末の頃には、寺子屋の役目も果していた。この草庵の絵は因幡志にものっている。

明治になってから、寺は無住となり、狐狸の住み家となり、時には博奕の会場ともなり、寺の荒れるを憂えて今日の位置に移した。移転に当っては、村の大男西尾某，三木某等が、仏像を背中合わせに背負って運んだという。この建築に際し、草庵跡から運んで来たので、古建築の時代に用いられた円い柱座の残る礎石が数基、土台石として使われている。

もとは草屋根であって、瓦葺としたのは昭和になってからである。

2. 慈住寺の縁起

因幡志が書かれてから57年後に出来た慈住寺の記録には、秀吉来伐の様が、次のように述べられている。

天正9年豊臣公来伐の節、近国の兵2,000余人中山に立籠る。豊臣公の臣、堀久太郎秀政も2,000余の軍卒をひきい、中山に攻め上った。危く見えたが、慈住寺，大安興寺，最勝寺，末寺合わせて300余カ寺、衆徒合わせて1,500、その勢合わせて3,000余騎で防戦した。中にも城光寺尊公阿舎梨、慈住寺龍証法師、最勝寺賢虫法印、何れも膂力抜群で、無双の大力なれば、大石大木を投げかけ投げかけ、よく防戦した。

寄せ手の軍勢は防ぎかね、堀久太郎を始めとし、皆、津ノ井谷へ引いた。ここの密音寺でしばらく息を休め、工夫をこらし、山裏から火を放った。折からの烈風で、一宇残らず灰燼となった。城光寺尊公は、煙を断ち切り、範頼公の守本尊観世音を自ら所持し、毘沙門を負い、長刀を打ち

振り、馬を飛ばして囲を破って逃れた。賢虫法印は範頼公の大刀を帯び、鞍鐙を懸け、馬をとばして牛の戸村へ逃れた。龍証法師は、本尊と脇立を堤へ投げ込み、その身は甲斐甲斐しく長刀を携え、敵を破って逃れた。その後、賢虫は最勝寺を造立したが、龍証は行方知れずとなった。

これが慈住寺縁起の一部であるが、嘉永5年、当住西明院号となっている。

因幡志が宇倍神社に奉納されたのは、寛政7年で、今より 184年前、縁起の嘉永5年は 110年前となる。

3. 古い慈住寺の建築年代

塔跡の心礎の沈んだ形式、単弁雄健な軒丸瓦の模様など、伽藍建築最初の飛鳥時代を思わせる。しかし、飛鳥時代の寺院は、日本書紀によると、全国で46カ寺、それもほとんど畿内に集まっており、広く地方に及んだのは白鳳期になってからである。

今日の技術を以ってしても、大建築に何年もの歳月を要しているのであるが、往時、一つの伽藍を建築完成するには驚く程の年月を要している。

例えば、日本最初の飛鳥寺は、588年に模型が出来、592年に金堂、596年に塔が完成し、仏像が出来上ったのは609年である。計画されてから22年を費している。

白鳳時代の法起寺をみると、建立されたのが685年、塔が706年完成し、この間22年となる。

山田寺はさらに長年を要し、金堂の出来たのは641年であるが、次に塔が出来、最後に仏像が安置されたのは685年だというから、45年を経過していることになる。かくして一寺院の完成するまでには、20〜30年を要していることがわかる。

白鳳期に入っても、その前半、斉明天皇の頃までは、飛鳥時代に創設された諸寺の完成に追われている。したがって、白鳳後半期、即ち天智天皇の時から後の堂塔配置に、日本的なものが見られるようになる。第一に、飛鳥様式を受けてはいるが、回廊内に金堂と塔を左右に並べ、後に講堂を置く方式で、再建された法隆寺，法起寺，川原寺，大官大寺などがそれで、広く行われている。第二が回廊内の中程に金堂を、金堂の前方左右に二基の塔を並べて、金堂の後方に講堂を置く方式があり、薬師寺はその例である。

以上のような諸点からして、慈住寺の建立は、白鳳後期のものと判断される。そして、瓦に格子叩きで大きさの異なる三種のものがあり、さらに青黒の瓦も考え合わせると、数度にわたって建築され、少くとも 20〜30年の歳月を要し、奈良時代の初期までにようやく完成したものと思われる。

4. 新しい慈住寺の建築年代

現在の建物の棟札に、元禄 □ 年かの記録があったが、子供のいたずらで、冬の雪すべりに持ち出して、今は見えない。また、この寺跡附近の畑から、寺に関係のある墓石を探してみると、

妙一信尼墓　　元禄１５年５月１１日

があり、草庵再建は元禄の頃であることは確かである。この墓は、大きな五輪一基と宝篋印塔とが一かたまりとなっている。ついでに最勝寺関係のことを因伯大年表から拾ってみると、草堂，鐘楼堂が再建されたのが慶安4年、本山に移ったのが寛文12年、鐘を鋳たのが延宝元年、護摩堂が延宝3年、僧舎の建ったのは延宝7年と、着々と復興を続けている（この間約30年）これに遅れること20年ばかりして、再建された慈住寺は、その後あまりの繁栄を見ずにしまった。

5. 地形の変化

縁起は物語りであり、神秘であることの方が多くて、史実ではないのだが、史実と一致している所もあり得るものだ。

慈住寺が焼失し、荒廃したのはいつの時か、これを縁起の豊公来伐の兵火と考えると、天正9年から元禄5年までは僅か112年。塔跡の北側に寺が建ち、西側に妙一信尼の墓が出来たのは元禄年間、大乗経の記念塔が享保元年金堂跡の東側に、中門跡地に西尾家の墓地が出来たのが宝永で、享保より古く、塔跡の東側回廊附近の林家墓地が安永年間。こんな具合で、古い伽藍一帯の地形は、少くとも元禄の頃までには出来上っていたことになる。しかも、元禄から今日までは、287年にもなる。

そもそも北側の船伏山は、頂上に安山岩の帽子を冠り、なだらかな形を見せるが、中腹に砂礫の厚い堆積層があって、ここに源を発する薬谷の浸蝕は甚だしい。谷は深く、両岸はそそり立ち、60度、70度の急斜面を作っているのである。

この薬谷の浸蝕と山ずりで、堆積されて出来た扇状地、これが十町歩もある慈住寺畑である。洪水のたびごとに、その鉾先は、或いは南に、或は東にのびて、その厚さと広さを増して行った。

近年、九州にあった諫早の災害以上の大山ずりが起きて、その鉾先きが東に向った。回廊にせまり、基壇を埋め、焼土と化した寺の瓦も灰も、共に埋まり、共に押し流されたのである。

私都の川筋が、いつの頃からか今の所となって、この扇状地の末端を洗うようになった。そして浸蝕を続けて行くうち、表土から一丈も下に、灰や瓦の層を見るに至った。木仏目天が、川の底から掘り出されたというのも真実かも知れない。

こんな地形変更というより、土砂の堆積は、一朝にしても起り得るものである。287年間現状で続いているものが、その前の110年では不可能だとも言い切れない。

村に伝わる伝承が、豊公の焼打ちとなっており、今一つは、この広い畑一帯に個人墓地が散在するが、五輪と宝篋印塔は、前述のものがただ一基あるだけである。これらのものは、今の慈住寺が建っている丘に限られている。ここには、数百の五輪と無数の宝篋印塔があるのである。こんなことからも、案外新しい時期の地形変更を考えてみるのである。

文禄2年の高麗水、慶長13年の大洪水（70年来稀有の水という）、寛永4年、寛永10年、寛永12年（国替より4年目の洪水という）、延宝元年、貞享3年と、天正から元禄までには、相当な

洪水があるようである。

それにしても、慈住寺はもともと一平面の土地に建てられたものではないようだ。即ち、大門の礎石だといわれるものと、塔の礎石とを比べると、一間ばかりの落差がある。既に、ある程度の扇状地が形成された台地の斜面を、整地することによって境内を一段と高くし、さらに基壇を盛り上げたのである。そして私都川が扇のように迂回して流れ、その要の所に寺が出来た。又、扇状地には門前町も出来た。これが当初の姿だと思うのである。

しかし、栄枯盛衰は世の常、平安も末期、群盗の横行する時となり、ついに寺院も焼亡の悲運にあった。それが、鎌倉に至って、昔の面影はないまでも再興され、門前町も余命を保った。程なく世は室町の頃となり、山名の一族、今島兵庫守の館が近くに出来た。それが山名と足利の不和になる京都での戦をはじめ、戦国の世、幾度かの戦陣で命を共にした強者達、これが今の慈住寺の丘の五輪となって、その度に数を増していった。かかる間にも、薬谷の浸蝕はいよいよ進み、山名と共に門前の町もだんだんとさびれていった。この間にあって、寺だけは僧兵を養い、御しがたい力となっていた。

さる程に天正の厄にあい、僧兵は寄る辺を失って四散し、土地に残った者は、今島氏族12戸と、門前の氏族12戸のみとなった。禿山となった船伏山は、文禄，慶長と山ずりを重ねて、今日の地形の仕上げをなした。この地形造りにあたって、寺の高い境内と基壇の盛り土が、ある程度の防砂堤となって、回廊の想像位置の東と西に、4.5尺の落差を残して昔の面影をとどめているのではないか。こんなことも考えられると思う。

2節　「土師百井式軒丸瓦」の分布とその意義について

清　水　真　一

土師百井廃寺の発掘調査では、出土した軒丸瓦は1型式2種類のみであった。すでに遺物の項で述べられた通り、八葉素弁の蓮華文で、外圏を二重圏文で囲む。これは、稲垣晋也氏の『飛鳥白鳳の古瓦』によれば、山田寺式の軒丸瓦の系統に入るもので、八葉単弁蓮華文軒丸瓦となっている。わたしたちも当初その名称を使用していたが、必ずしも山田寺式の範疇（ちゅう）に入れることはないと考え、素弁の類に含めた。

この土師百井廃寺出土の軒丸瓦は、鳥取県下では唯一の出土と思っていた。ところが、稲垣氏の論に、鳥取市菖蒲廃寺にも出土例があると記される。早速調査したところ、因幡地方の古代寺院跡の研究者の一人である木山竹治氏によって、菖蒲薬師寺から採集されていることがわかった。

現在、鳥取県立博物館所蔵である。また同博物館にはもう一つ、薬師寺出土の二重圏文素弁蓮華文軒丸瓦破片が所蔵されており、同じく研究者の一人、川上貞夫氏の採集になるものかと考えられる。県下で、薬師寺と呼ばれる古代寺院は、『因幡堂薬師縁起』にもある通り、鳥取市菖蒲・薬師寺以外になく、稲垣氏のいう「菖蒲廃寺」出土と考えてあやまりはないと思われる。さらに、土師百井廃寺の瓦を焼いたと考えられる郡家町奥谷・奥谷瓦窯出土の軒丸瓦の中に、土師百井式軒丸瓦があることも判明した。これは、画家中島菜刀氏が採集されたものを、川上貞夫氏がうけつぎ、県立博物館に所蔵されているものである。これにより、現在三カ所で土師百井式軒丸瓦が出土したことがわかる。

土師百井式軒丸瓦を出土する土師百井廃寺と奥谷瓦窯は、相近い距離に位置する。奥谷瓦窯は、広義の私都古窯跡群の西端に位置する。私都古窯跡群は、おおよそ6世紀中頃～9世紀初頭にかけて須恵器を生産した古窯跡群で第1章でも述べられたが奥谷瓦窯は群中で生産が増大する時期の窯である。土師百井廃寺については、本論で述べられており割愛するが、土師百井廃寺のすぐ北東の位置にある池田廃寺からは、土師百井廃寺で使われたと同様な平・丸瓦がみられ、おそらく池田廃寺からも土師百井式軒丸瓦が出る可能性をもつ。菖蒲廃寺は、千代川の下流西岸，鳥取市菖蒲の地にあり、千代水平野が開ける喉元近くにあたる。古代山陰道は国府町国分寺附近から直線で西へ走り、千代川をわたり、服部・菖蒲附近を通り、野坂をへて吉岡へ至るルートが想定される。附近には服部遺跡が知られ、西側の丘陵東斜面には千代川左岸流域では最も新しい型式の横穴式石室墳の古海古墳があり、菖蒲廃寺との関係が強い。昭和42年に菖蒲廃寺は発掘調査され、藤原宮式軒丸瓦が少量出土した。そのため白鳳末期～奈良初期の創建と考えられていたが、今回の土師百井式軒丸瓦の確認で白鳳後期とやや古くなった。

この三地域は、千代川とその支流私都川にある。奥谷瓦窯で生産した瓦は、陸路で土師百井廃寺へ運搬するのはたいへんな作業であるが、私都川を使った水運が可能であれば、陸路ほどのことはないと考えられる。また、私都，千代川を使えば、菖蒲廃寺までも比較的容易に運搬できたと思われる。とすれば、菖蒲廃寺出土の土師百井式軒丸瓦がなぜ奥谷瓦窯から供給を受けたのかを考えねばならないであろう。

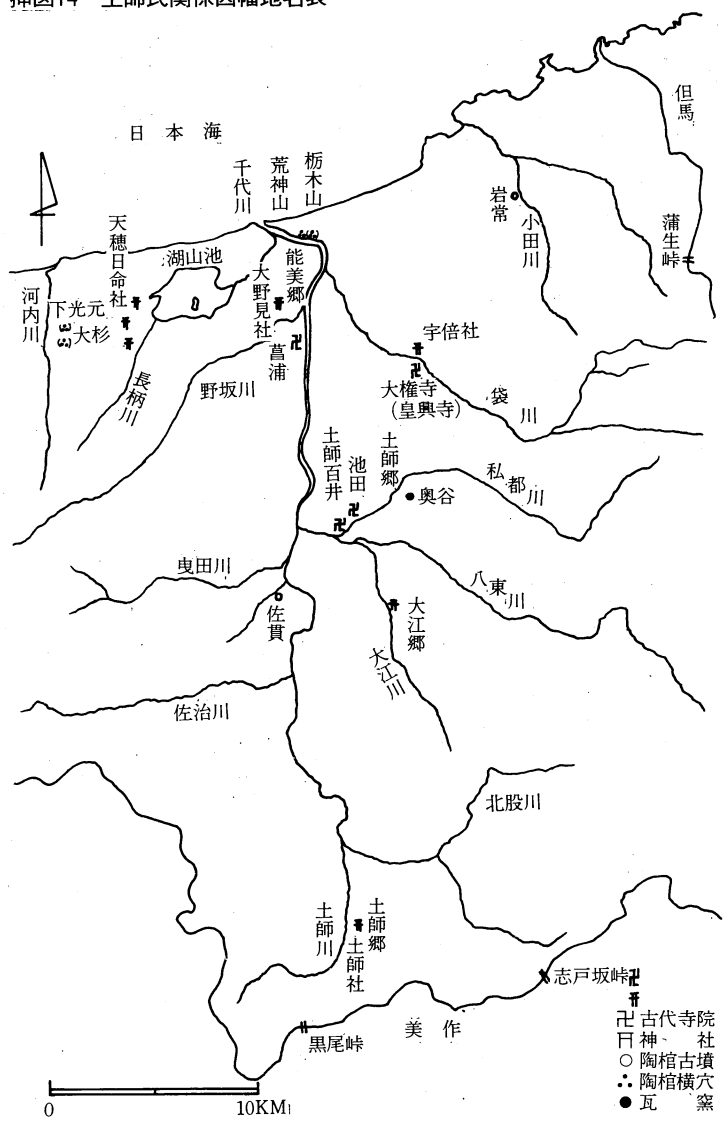
鳥取県下で最も古い寺院関係の文献に「伊福部氏系図」がある。伊福部氏の系図は、田中卓氏が注目して以後、佐伯有清氏らの研究により、価値の高い資料と考えられている。これによると、第26代・大乙上都牟自臣の項に『皇興寺の願主』とある。この都牟自臣の子が大乙上国足臣で、佐伯有清氏によれば、国足が大宝年間に何らかの公的職に就いていたと考えられ、和銅元年に死去した伊福部徳足比売臣の兄弟にあたると考えられている。とするならば、都牟自臣が活躍した時代は7世紀後半期と考えられる。彼が「願主」となった寺院は、伊福部系図からすれば因幡以外とは考えられない。この時代に比定できる因幡の古代寺院は、詳細は不明なものの出土する軒丸瓦の型式からすれば、飛鳥・豊浦寺系の素弁八葉蓮華文軒丸瓦を出す大権寺廃寺以外考えられない。ここに伊福部氏＝皇興寺＝大権寺廃寺と横の関係が把えられる。他に因幡では、このよう

な文献はみあたらないが、土師百井廃寺ではどのような推定ができるであろうか。土師百井の地はその名の通り、八上郡土師郷にある。土師郷と石田郷の境に位置する百井（桃井？）の土師領分を土師百井と呼ぶ。土師郷は南の大江郷とともに土師氏にちなんだ地名である。土師氏に関係した豪族のいたことが推定できる。土師氏といえば、古事記に記載された野見宿禰を祖とする豪族であり、野見宿禰は角力や埴輪作りなどの起源とされるユニークな人物であり、出雲氏の祖先としても知られる。直木孝次郎氏の研究等で、野見宿禰と土師氏との関係が文献面をとおして明らかにされている。さて、千代川下流左岸には高草郡能美郷があり、能美郷には野見宿禰命をまつる式内社大野見宿禰命神社がある。この神社の南、高草郡古海郷に作られた古代寺院が、土師百井式軒丸瓦を出土する菖蒲廃寺である。つまり、菖蒲廃寺と大野見宿禰神社は、郷こそ異るが同じ高草郡内に隣接し、土師氏関係の豪族がその願主であったと推定できる。そして土師百井廃寺の願主ともおそらく同族と考えられ、それゆえに土師百井式軒丸瓦の供給をうけたものと考えられる。

千代川を中心とした因幡国の奈良時代には、智頭郡内には土師郷があり土師神社がある。八上郡には土師郷・大江郷があり、曳田郷には式内社売沼神社があり八上姫を祀る。さらに高草郡内では能美郷に大野見宿禰命神社がある。湖山池の西、福井の地に式内社・天穂日命神社があり、天日名鳥命神社（大畑地区）、阿太賀都健御熊命神社（御熊地区）とともに土師氏の同族、出雲氏系の神々を祀る。特に天穂日命神社は、宇倍神社が正三位に位される以前、867年に共に正三位をうけ、官社に列されている。これらは県史古代編で述べられているところであるが、これらの地域の考古学的環境もまた土師氏関係の資料がみられる。土師氏の考古学的考察として、丸山竜平氏の論文がある。それによると、土師氏関係の地の6～7世紀代には、横穴・陶棺が限られてみられる。このような視点でもう一度上記の地をみてみよう。湖山池の西の三社の地は、平野も狭く、考古学的遺物も少い地域であるが、低い丘を越えた気多郡大原郷側には、下光元横穴群や大杉横穴群が集中してみられる地域である。能美郷は大野見宿禰命神社のある地だが、郷の北東千代川を渡った現在の浜坂の地には、栃木山・荒神山の二つの横穴群があり、荒神山横穴群中から陶棺が出土している。おそらく砂丘の荒地であったとみられ、千代川右岸ではあるが、広義の能美郷内に含めてよいと思われる。八上郡曳田郷では、河原町佐貫・大平1号墳の横穴式石室近くから陶棺の出土があり、土師氏との関連性が考えられる。また陶棺の製作技術は、寺院建築に用いられる鴟尾製作とも共通する点があり、特に因幡では多くの巨大な鴟尾がみられるが、奥谷瓦窯で焼いており、かつ製品とみられるものが、土師百井廃寺でも出土する。陶棺は、丸山竜平氏の前記の論によれば、全国での出土数の半数以上が美作（岡山県北部）にある。美作と因幡とは隣接し、陶棺が容易に早くから入り込んでいい位置関係であるが、美作の数量に比べ、因幡は3遺跡しかみられない。また、美作での土師氏と陶棺の関係も判明しておらず、美作には横穴がみられないという点があげられる。ゆえに、ストレートに関連性を求めることに無理があるかもしれない。しかし、因幡・美作国境附近を水源とする千代川の流域に多くの土師氏関係の足跡

をみるにつけて、因幡国の代表的豪族伊福部氏以外の、古代史に登場してこない部分で活躍した多くの豪族の存在を推定でき、その有力な一員として土師氏の存在を知り、土師百井廃寺や菖蒲廃寺は、彼らが願主となった7世紀末期の寺院であったと推定できるところである。

挿図14　土師氏関係因幡地名表



第4章　ま　と　め

土師百井廃寺の発掘調査は今回がはじめてであり、期間も短かったが、いくつかの重要な事実を知ることができた。以下、今回の調査で明らかになったことと、若干の関連事項を記しておく。

(1) 伽藍配置は、従来から推定されていた法起寺式であると考えられる。

(2) すでに史跡に指定されている塔跡は、今回の調査で基壇南端部を明らかにすることができ、基壇は一辺約16m四方のものであったと思われる。

(3) 金堂は、基壇の版築面と西・南端部の一部を検出できた。このことから推定して、基壇は東西18～20m，南北約16mであったと考えられる。

(4) 中門は地覆石下の布敷石列の東端部を検出した。基壇の規模は、塔・金堂の位置などからみて、東西約20m，南北約15mのものと推定される。

(5) 回廊で明確に検出できたのは、西回廊の一部だけであった。幅5.4mで、両側に平石を立て並べたものであった。

(6) 寺域の北限は、塔中心より約38m北であったと思われる。

(7) 伽藍の特色としては、塔および中門がかなり大きく、金堂は小規模であったと推定される。

(8) この地域は、中世に慈住寺があったと伝えられている。中世の遺物は、磁器片，羽釜片等が所々から出土したが、遺構としては、寺域北東部で検出された掘立て柱跡だけであり、今回の調査では慈住寺の寺院跡は見い出せなかった。

(9) 土師百井廃寺の瓦は、郡家町奥谷の窯跡で焼かれたものである。奥谷瓦窯跡からは、かなりの平・丸瓦片とともに、当廃寺にみられる軒丸瓦片や鴟尾片が出土している。

(10) 軒丸瓦は、重圏文八葉素弁蓮花文の一様式だけである。

軒丸瓦は、従来「重圏文八葉単弁蓮花文瓦」として取り扱われてきたが、明らかに子葉の存在が認められないことから、以後「重圏文八葉素弁蓮花文瓦」とする。しかし、周縁の3重重圏文・八葉の花弁・弁区と周縁間の圏線など、いわゆる「山田寺式」の系統に属するものであることは、否定できない。花弁が素弁であり、中房と弁区間に圏線を有することなどから、「土師百井式」と称してよいであろう。

土師氏一族の寺院跡と考えられている大阪府藤井寺市の土師寺からは、いわゆる「山田寺式」の軒丸瓦が出土しており、堺市の土師廃寺からも同系統＜藤沢一夫氏は古市寺（山田寺）式亜式―― 和泉土師廃寺式＞の軒丸瓦が出土していることは興味深い。土師寺の山田寺式軒丸瓦の中には、やや小さい中房は1＋4の蓮子を配しているものがあり、土師廃寺の軒丸瓦は稜線を存する八葉花弁であることなど、「土師百井式」との共通点が見られる。

(11) いわゆる軒平瓦は一片も出土しておらず、使用されていなかったものと考えられる。

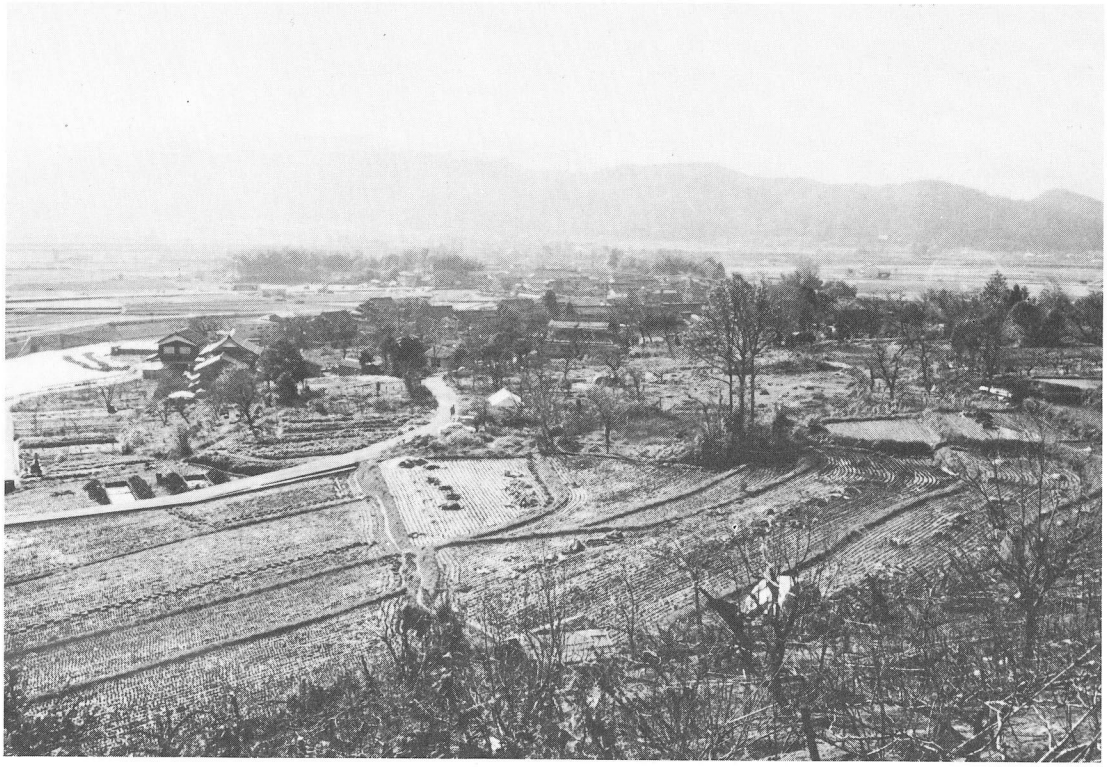
⑿　鴟尾は、表面の平行線文，裏面の同心円文と叩きしめられて作られており、岩美郡国府町の等ケ坪廃寺で出土している鴟尾と同じ製作方法で製造されたものと思われる。

⒀　土師百井廃寺の創立年代は出土した瓦や須恵器片などから、白鳳時代後期と考えられる。

現地説明会（昭和53年７月15日）
中央　吉村調査員　　右はし２番目　三木調査員

▣ 昭和54年3月20日　▣ 郡家町教育委員会発行　電話（08587）2−0201

図版1



上　土師百井廃寺跡遠写　北より
下　土師百井廃寺跡遠写　東より

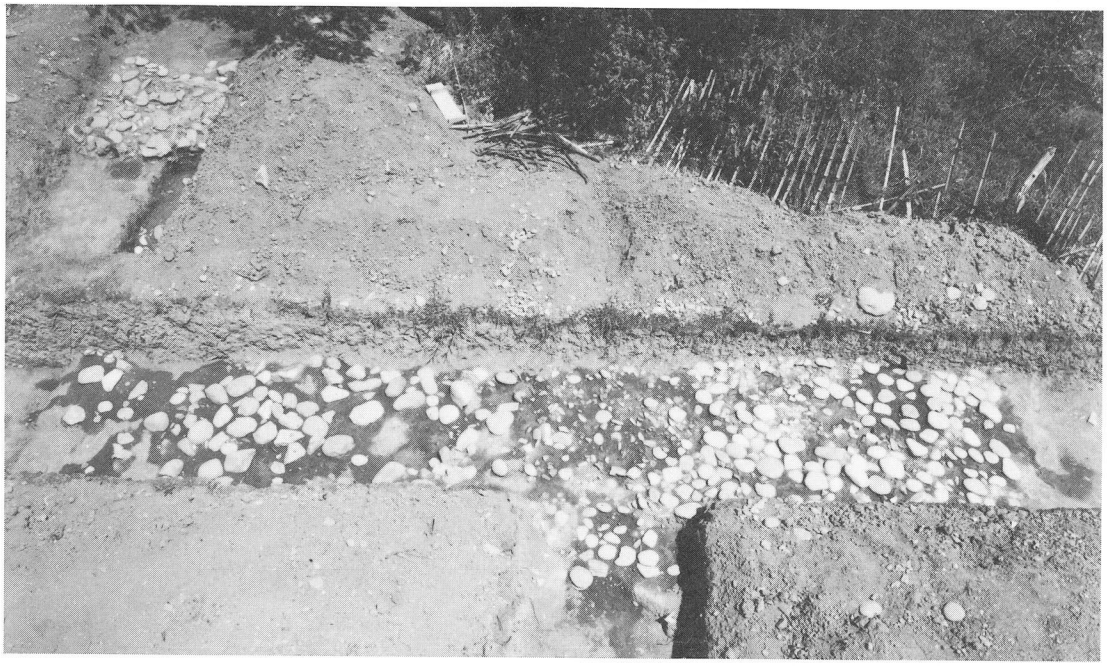
図版2

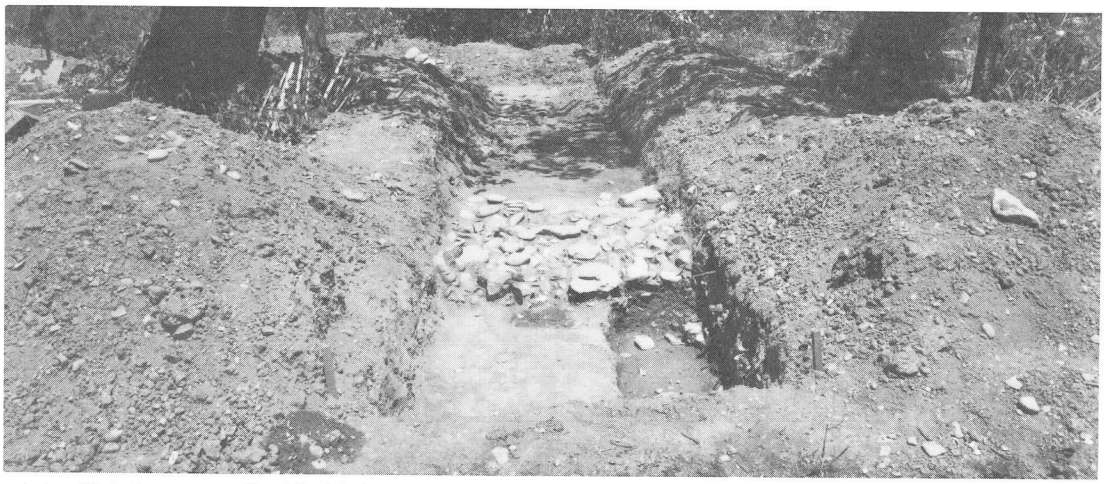
上　土師百井廃寺跡近写（西より金堂、中門推定地を）
下　土師百井廃寺跡近写（西より講堂、金堂推定地を）

図版３

第１トレンチ発掘前

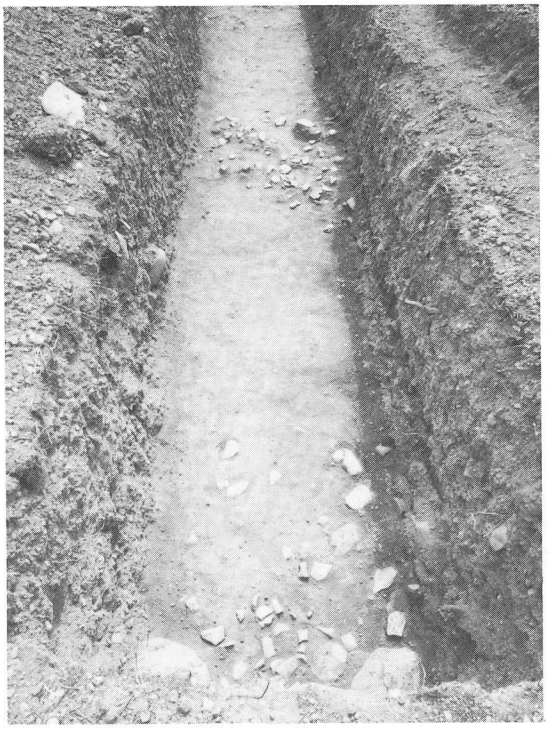
第６、７トレンチ発掘前

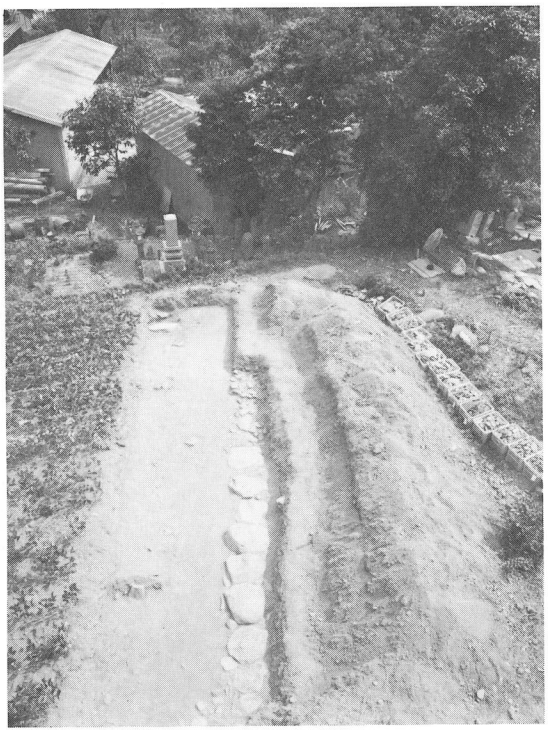




上　第１トレンチ　敷石群（金堂南敷石群）　下　第４トレンチ　金堂石敷基壇（南面）

図版4





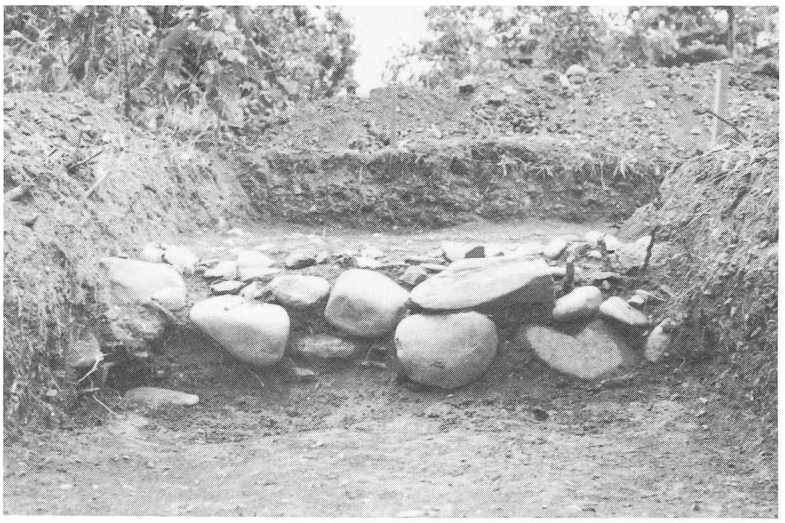
右上　第２トレンチ　西側から南側を
左下　土師百井地区　航空写真

右上　第３トレンチ北側　塔と南基壇
右下　第３トレンチ南側　中門東基壇

図版５

第２トレンチ東と第４トレンチ交差点（上が南）
金堂の南と西の石積基壇

第４トレンチ
金堂南石積基壇



第２トレンチ東
金堂西石積基壇

図版６

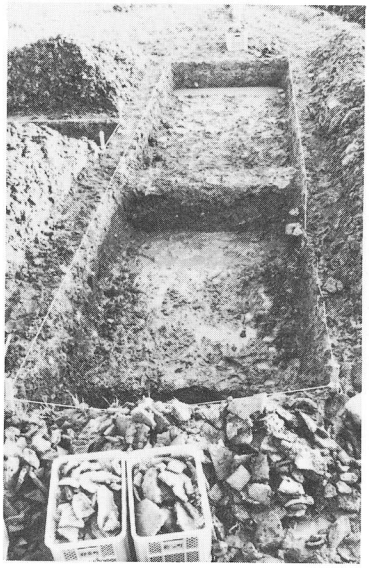
第５トレンチ東側
回廊西石列

第３トレンチ南
中門外南東出土礎石

国指定　塔礎石群
中央下は心礎

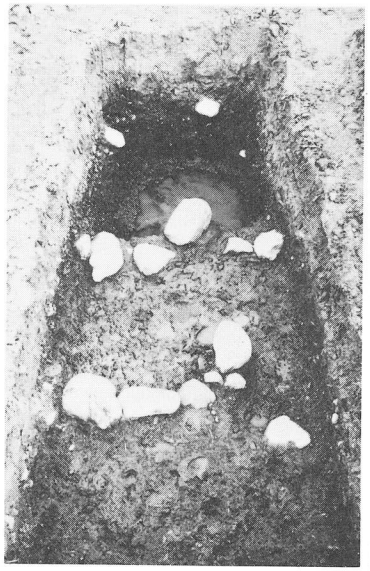
図版7

第6トレンチ(南から)

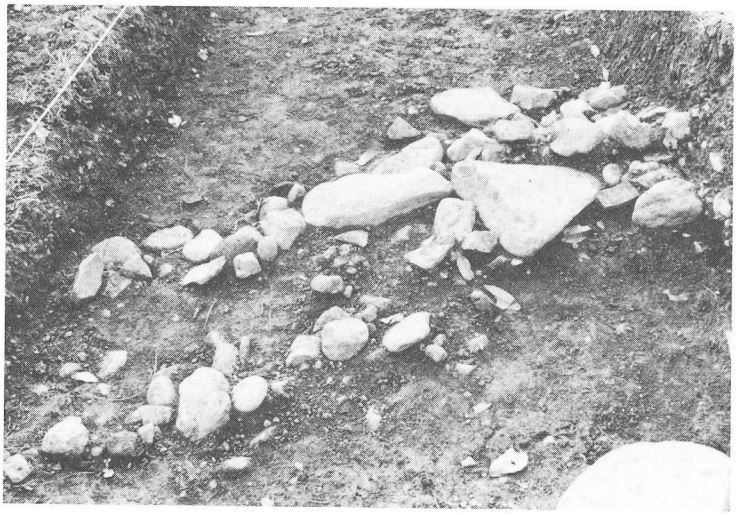


第8トレンチ(北から)

第9トレンチ(北から)

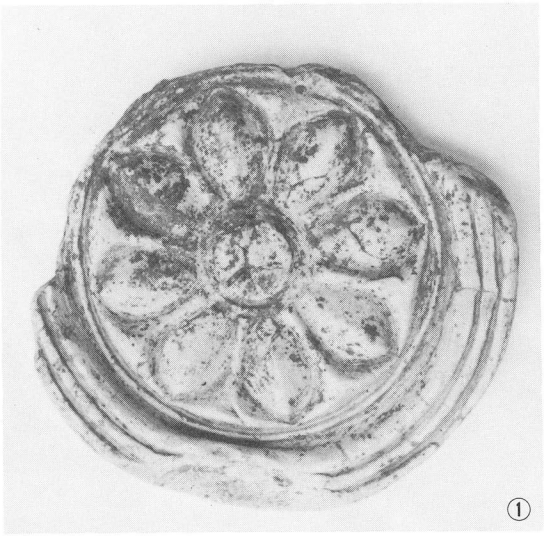


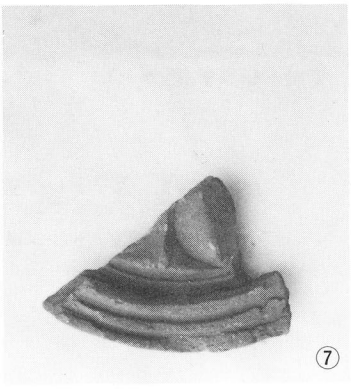
第10トレンチ(西から)



右中段　第7トレンチ
北から（北築地石列）
右下段　第7トレンチ
南から

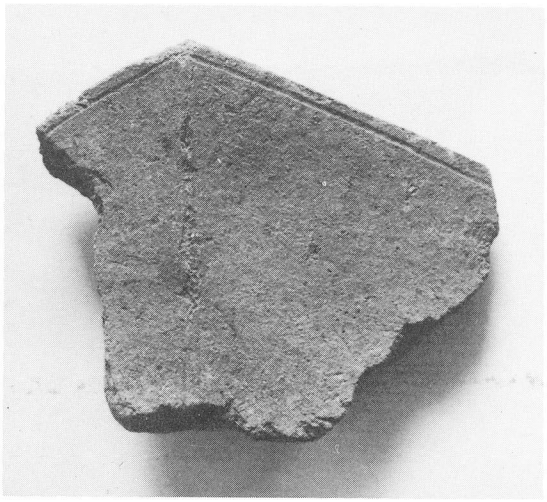
図版８



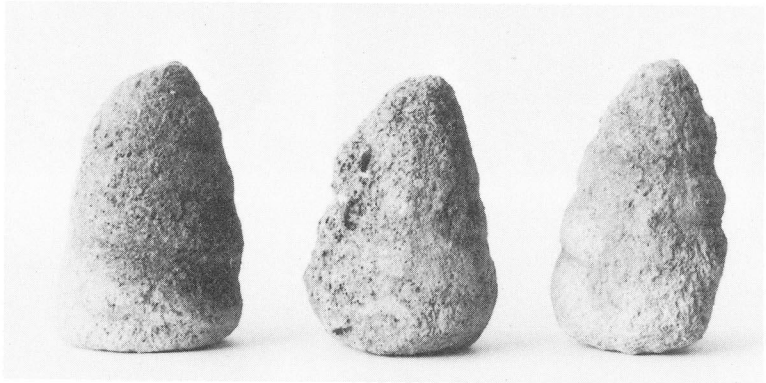


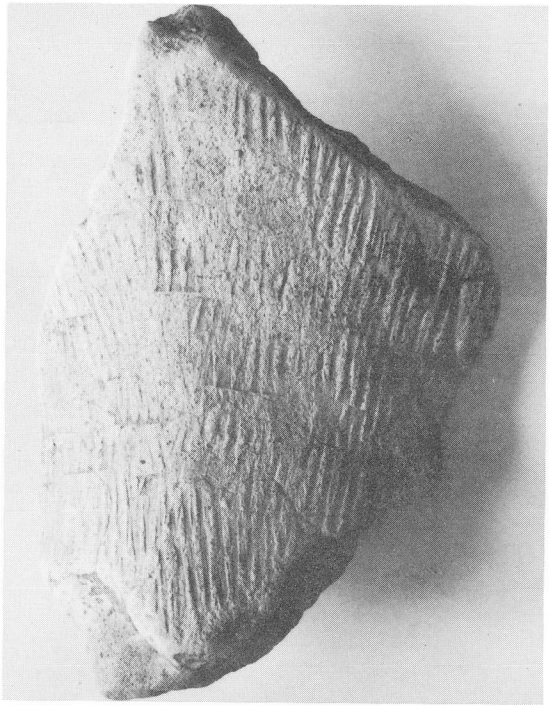
土師百井廃寺跡出土軒丸瓦（番号は挿図８と共通）

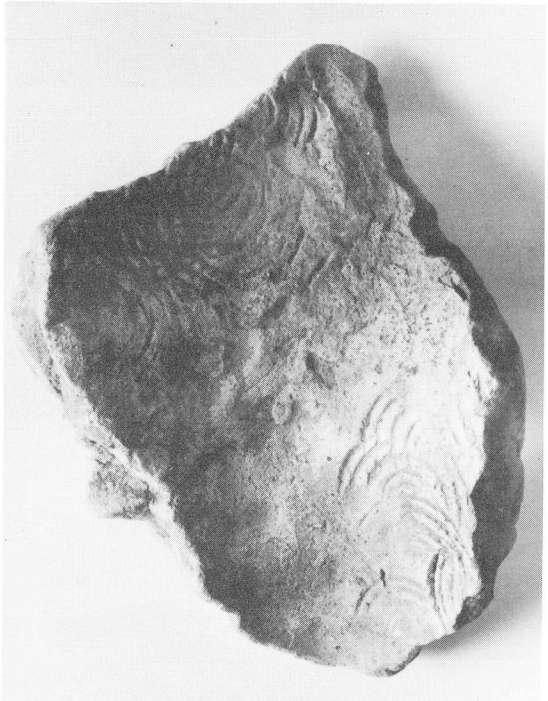
図版９



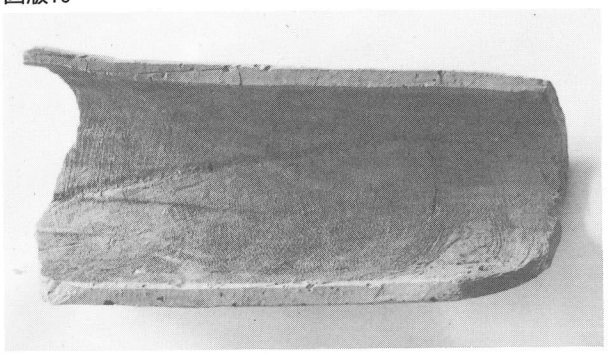
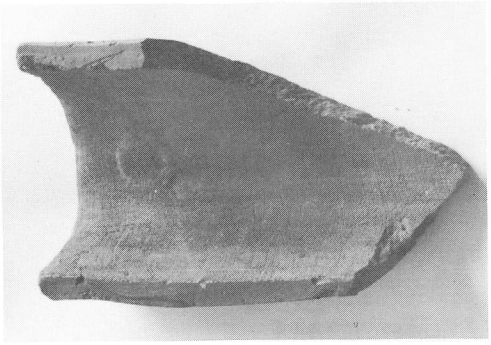
上段　右　鎮壇具
　　左　因幡瓦
中段　螺髪
下段　右　鴟尾
　　表
下段　左　鴟尾
　　裏

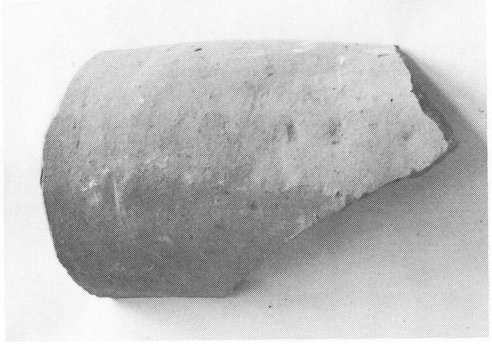
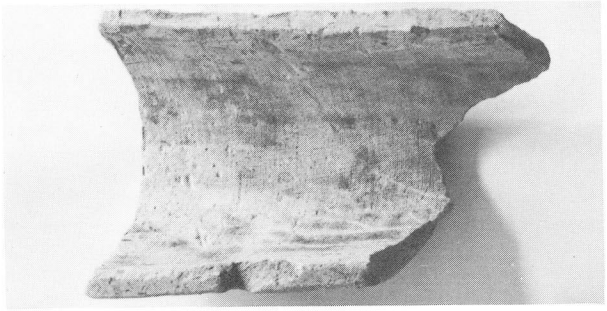
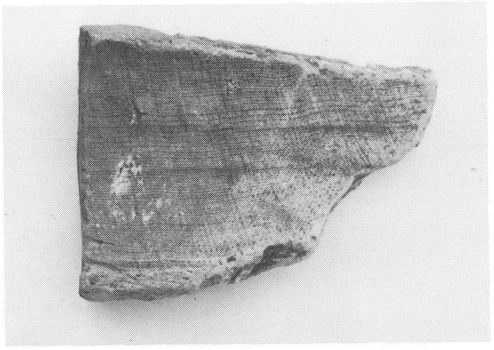






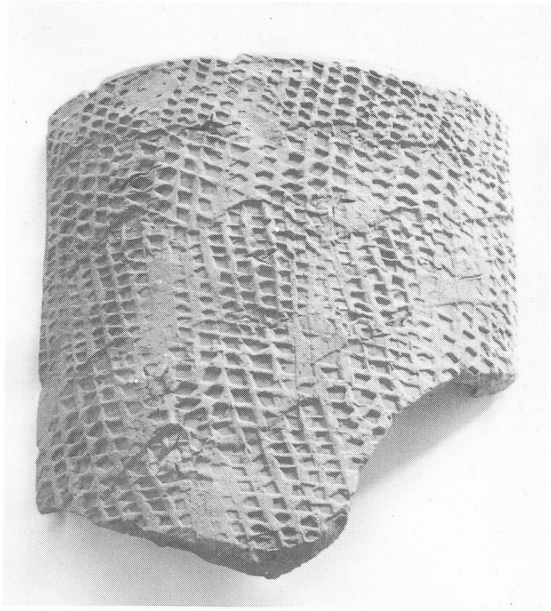
図版10

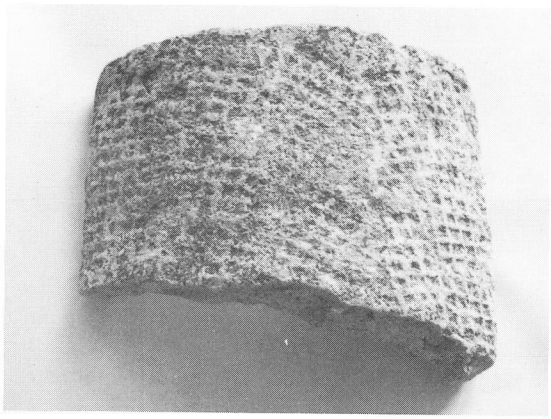



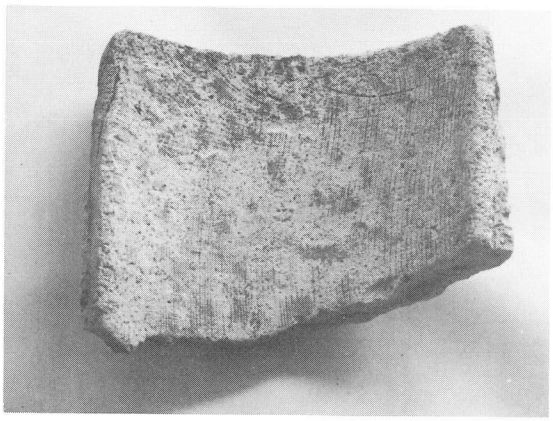




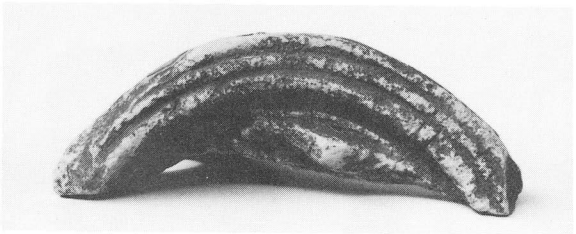
上段　左　丸瓦１
上段　右　丸瓦３　｝挿図10と同番号
下段　右　丸瓦２
下段　左　平瓦

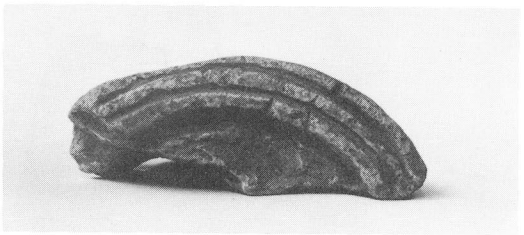
図版11

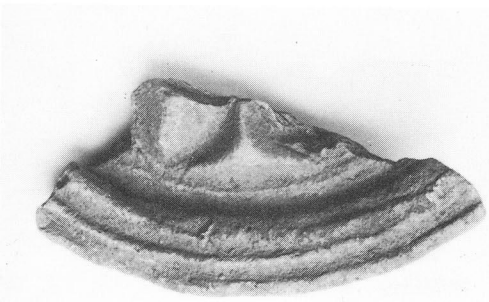


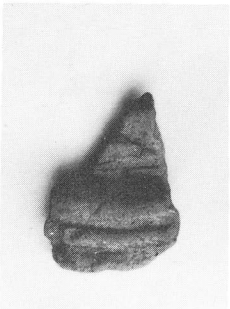






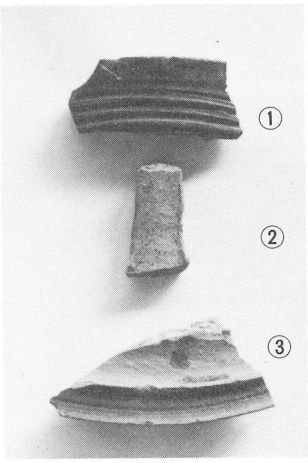


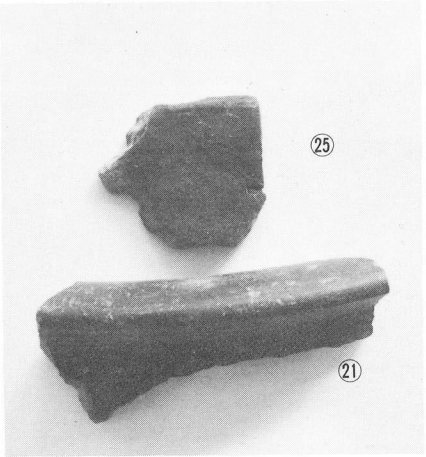


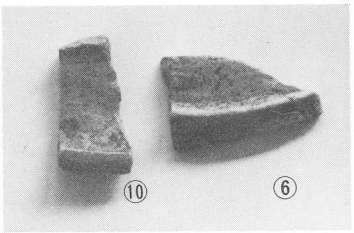


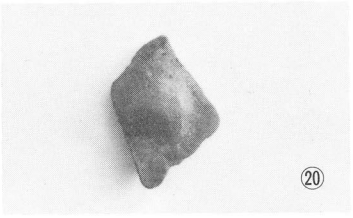
上段　平瓦１（四枚造り）
中上段平瓦２（一枚造り）
中下段　奥谷瓦窯出土
　　土師百井式軒丸瓦
下段　　菖蒲廃寺跡出土
　　土師百井式軒丸瓦

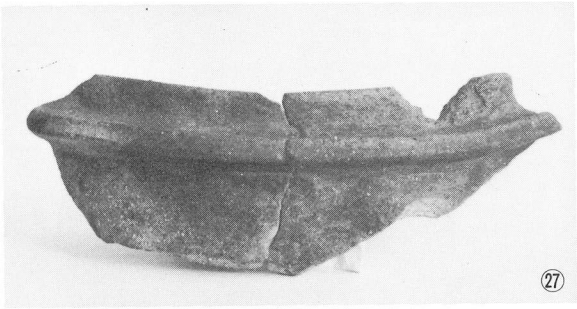
図版12



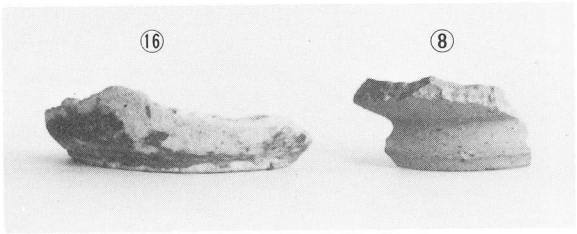




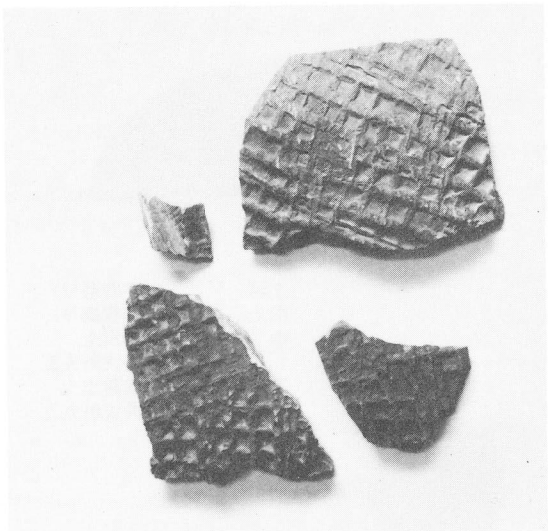




大権寺廃寺跡出土軒丸瓦
(因幡国分寺発堀調査報告書Ⅰ)より



挿図12と同番号



左　勝間田焼（表面）

右　勝間田焼（裏面）